

聖徒の道 1 1982





末日聖徒イエス・キリスト教会

大管長会

スベンサー・W・キンボール
 N・エルドン・タナー
 マリオン・G・ロムニー
 ゴードン・B・ヒンクレー

十二使徒評議員会

エズラ・タフト・ベンソン
 マーク・E・ピーターセン
 リグランド・リチャーズ
 ハワード・W・ハンター
 トーマス・S・モンソン
 ボイド・K・バックナー
 マービン・J・アシュトン
 ブルース・R・マッコンキー
 L・トム・ベリ
 デビッド・B・ヘイト
 ジェームズ・E・ファウスト
 ニール・A・マックスウェル

顧問

M・ラッセル・バラード
 ローレン・C・ダン
 レックス・D・ピネガー
 チャールズ・A・ディディエ
 ジョージ・P・リー
 F・エンツィオ・ブッシェ

編集長

M・ラッセル・バラード

国際機関誌

編集主幹：
 ラリー・A・ヒラー
 編集副主幹：
 デビッド・ミッチェル
 子供の頁編集：
 ボニー・ソーンダース
 デザイナー：
 ロジャー・ギリング
 制作：
 ノーマン・ブライス

もくじ

「もし汝らに備えあらば 怖るることなからん」マリオン・G・ロムニー.....	1
苦難の時のために.....	ジェフリー・R・ホランド.....	7
心促す福音の教え.....	レックス・A・スキッドモア.....	14
学習は万人の務め.....	ジョー・J・クリステンセン.....	18
オバボ：その信仰の力.....	カール・フォノイモアナ.....	19
合言葉.....	J・リン・ブラッドフォード.....	24
ヘイスティ.....	テリー・ディル.....	25
主は我に光を与えたもう.....	トーマス・J・グリフィス.....	28
上空からのながめ.....	リー・ダルトン.....	33
帰らなくてもいいのですね.....	ジャック・レモン.....	36
空中都市.....	ウイリアム・ビショップ.....	38
カウボーイアリ.....	ジーン・キング.....	40
小さなお友だちへ.....	G・ホーマー・ダラム.....	43
ローカル・ニュース.....	46

今月の表紙

今月号にはサモアの偉大な信仰の人オバボについての記事が紹介されているが、表紙は家族のアルバムからのオバボのポートレートと、サモアのモルモン定住地であるサウニアツの風景である。

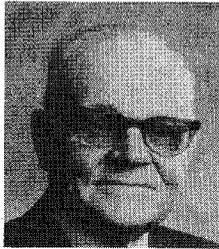
聖徒の道 1 月号

発行所 末日聖徒イエス・キリスト教会
 東京都港区南麻布5-10-30
 印刷所 株式会社 精興社
 配送 東京ディストリビューション・センター
 東京都世田谷区上用賀4-9-19
 定価 年間予約2,200円
 海外予約2,200円

INTERNATIONAL MAGAZINE PBMA 0416 JA Printed in Japan

郵便振替口座番号 東京0-41512
 口座名 末日聖徒イエス・キリスト教会
 東京ディストリビューション・センター

「もし汝らに
備えあれば
怖ることなからん」



第二副管長
マリオン・G・ロムニー

私 たち末日聖徒は、啓示の中で知らされていることもあり、他のどの民よりも今日の様々な問題に対処する備えがよくできていると私は思います。襲い来るそれらの問題を私たちは詳しく知っており、それを解決する鍵を握っています。

大抵の人は、世界情勢や自分個人の経験を、固定観念化した特定の標準に照らして解釈する傾向があるようです。試練やストレスの多いこの末日に、全能の主が御自分の民を導き守って下さるという事実は、非常に早くから私の固定観念になっています。

子供の頃、私は破壊的な革命によって分裂したメキシコに住んでいました。政府軍、革命軍双方の軍隊が互いにあちこちで追撃を始めるにつれて、私は非常に不安になり、動揺しました。私は、革命軍が北部のシウ

「神は悪人が義人を亡ぼすのを許したまわないから、あらゆる人が神のはげしい怒りを蒙る日がじきにくる」(Iニーフアイ22:16)

グード・フアレスからチワワへ、そして政府軍が南部のトレオンから同じチワワへ進軍しているという知らせを受けた時のことをよく覚えています。両軍がわずか16キロしか離れていないカサ・グランデではち合わせし、戦いが始まった時、私の不安は驚きへ、実際恐怖へと変わっていきました。仲間の中でも冒険心に富んだ者たちは、モンテスマ山の頂上に登り、そこから双眼鏡

で戦いの様子を見ていました。

こうした刺激的な忘れ去ることのできない幼年時代の経験もあって、メキシコの地に戦いがあった間、私には心の平安といった教義を理解することは困難なことでした。しかしそれでも、慈愛深い母が小さな子供たちに子守歌を歌ってあげながら寝かしつけるのを見聞きしているうちに、私の恐怖心はいくらか和らいできました。母の歌う歌の言葉が私を慰めてくれたのです。その言葉のいくつかは、3分の2世紀という長い間、私の心の中に残っています。それは讃美歌、「導きたまえよ」の中の歌詞です。

地のどよめくとき おそれを救い
地のさばきの日は シオンに救いませ
(讃美歌90番)

また、パーレー・P・ブラットの次の歌詞です。

待ちに待てり かばいて自由
人に与う

地は火により きよめたまえ
(讃美歌28番)

W・W・フェルプスの詩もそうです。
エホバにわれら頼りゆかん
なやみ多き末の日に
刈り入れ果て主、来ます日に
義人とともによみがえらん
(讃美歌124番)

年が経つにつれ、私は少しずつ聖典に親しむようになりました。そして、この希望と勇気に満ちた美しい詩を書いた兄弟たちは、啓示によって、主が予見し予言された災いの中にあっては、主が聖徒たちを守りたもうという知識があったことを知りました。ニーファイは、私たちの時代をこう語っています。

「神は悪人が義人を亡ぼすのを許したまわれないから、あらゆる人が神のはげしい怒りを蒙る日がじきにくる。それであるから、神がそのはげしい怒りを下したまい義人たちを守るために火をもってその敵を亡ぼさねばならなくとも神はその能力で必ず義人たちを守りたもう。故に義人はおそれるに及ばない、予言者の言葉に『たとえ火の力を以てするに至るともかれらは救わるべし』とあるからである。」(I ニーファイ22:16—17)

主は啓示によって、教義と聖約の「はしがき」をお与えになった時、御自身の啓示されたことを進んで「すべての人に知らしめる」と言われました。

「そは、われは人々を偏り見る者にあらざれば、すべての人々をしてその日の速に来るを知らしめんと思えばなり。而して地より平和の取り去られ、悪魔自らの領土を支配する時はなおいまだしといえども今や近きにあり。されど主もまたその聖徒ら

を支配し、その真中にありてこれを統治せん。而してイツミヤ、すなわちこの世に下る審判のために天より降り来らん。」(教義と聖約1:35—36)

イエス御自身、オリブ山で弟子たちを前

私たちが福音に従った生活をすれば、争いは起こりません。しかし、私は、たくさんの人々が悔い改めて大きな苦難に遭わなくなるとは思っていません。

に立たれた時、私たちの時代とその後の時代を予見されました。弟子たちがエルサレムの滅亡について、また主の再臨のしるしについて尋ねた時、イエスはこのように答えておられます。「この民(御自身の生きておられた時代の人々)は滅亡して万国の民の中に散らされん。……

されどこれらの民は再び集められん。されど、異邦人の時満つるに及ぶまでそのま

まに置かれん。その日、戦につきて聞かん、また戦のうわさにつきて聞かん。全世界は揺れ動き、人々は怖れおののき……人々の愛は冷やかになり、不法は満つべし。異邦人の時始まるに及び、暗きに坐する者の中に光輝やき出でん、この光はわが完全なる福音なりとす。されど彼らはその光を受け入れず。そは、彼ら光を認めざれば、人の教えの故によりてわれにころを背くればなり。而して、その時代に異邦人の時満つるべし。この時に当り、その世に立ちて而も地に溢るる懲しめを見終りて後始めて過ぎ行く人々在るべし。世を滅ぼすべき疫病、地を覆うべければなり。されどわが弟子たちは、聖地に立ちて動くことなかるべし。されど悪しき人々の中には、声を挙げて神をのろい死ぬる者たちあらん。また地震も至る所に起り多くの荒廃は来らん。されどなお人々はわれに向いてころを頑固にし、互いに剣を執りて殺し合うべし。」(教義と聖約45：19、25—33)

私は、心に平安を抱こうとする人々は、試練や悩みの中であってそれをどう維持していくかを知っておく必要があると思います。私たちが福音に従った生活をするならば、争いは起こりません。平和でいられるはずですが。しかし私は、たくさんの人々が悔い改めて大きな苦難に遭わなくなるとは思っていません。再び救い主の言葉に戻り

ましょう。先程引用した言葉を語られたイエスは、弟子たちが悩んでいることを知っておられました。イエスは彼らにこのように言っておられます。「汝らころを悩ますことなかれ。そはすべてこれらの事起る

聖霊を受け、その導きに従うならば、この混乱した時代にあつて守られ、支えられる人々の中に加えられるでしょう。

時は、汝らに為せる約束の成就するを汝らの知らんが故なり……およそわれを畏るる者は、来るべき主の大いなる日、すなわち人の子の来る徴を待ち望みつつあらん。而して、人々種々の徴と驚異とを見ん。これらの徴は仰げば天にあり、伏して見れば地に示さるべければなり。人々は、血と火と烟霧とを見ん。主の日来る前、日輪は暗くなり、月は血と変り、諸々の星は天より落

つるべし。而して、残れる人々はこの地（エルサレム）に集めらる。その時、彼らわれを求めん。見よ、われ来らん。而して彼ら、われ能力と大いなる栄光の衣を着けて天の雲に乗り、すべての聖き天使らと共に来るを見ん。而して、およわれを油断なく待たざる者は断ち切れん。」

ここに鍵があります。

「わが栄光をもて来るその日に、十人の処女につきてわが語りしたとえは成就すべし。賢くして真理を受け入れ聖霊の導きに従い騙されざりし者は……伐られて火に投げ入れらるることなくその日に堪うるべし。」（教義と聖約45：35, 39—44, 56—57）

「賢くして真理を受け入れ聖霊の導きに従い騙されざりし者」（教義と聖約45：56—57）です。正しいことをしようとしていと言うだけでは、安心とは言えません。安心できる人々というのは、聖霊の導きに従って騙されない人々であると思います。そのような人々は、伐られて火に投げ入れられることなく、その日に堪えることができるのです。

「地はゆずりとして彼らに与えられ」ます。この地は、私たちの敵に受け継がれることはないのです。

「地はゆずりとして彼ら（すなわち聖霊の導きに従い騙されざりし者）に与えられ、彼らは殖え満ちて強くなり、その子孫らは

罪を犯すことなく育ちて救いに入らん。主は彼らの中に在りてその栄光は彼らの上に輝き、主は彼らの王にして立法者たるべし。」（教義と聖約45：58—59）

救い主は、「聖霊の導きに従い騙されざりし者」（教義と聖約45：57）と言われた時、聖霊について語っておられたのではないかと思います。聖霊とは真理のみたまです。主がここで言われている聖霊また今述べた私の考える聖霊を受けるということは、天からの啓示によって導かれるということです。私は確かにそのような導きを受けられると信じています。

1839年、予言者ジョセフ・スミスはエライヤス・ヒグビーと共にワシントンに行き、そこで大勢の政治家と会見しました。彼は合衆国大統領とも何度か会見しています。ある会見の際、バン・ビューレン大統領は「私たちの教会は他の教会とどう異なっているのか」といった質問をした。これに対してジョセフ兄弟はこう答えた。最大の相違のひとつは、バプテスマの施し方である。また按手札によって聖霊の賜を受けることもそうである。他に考えられることは、すべて聖霊の賜に関連したことである。」

（*History of the Church* 「教会歴史」4：42）

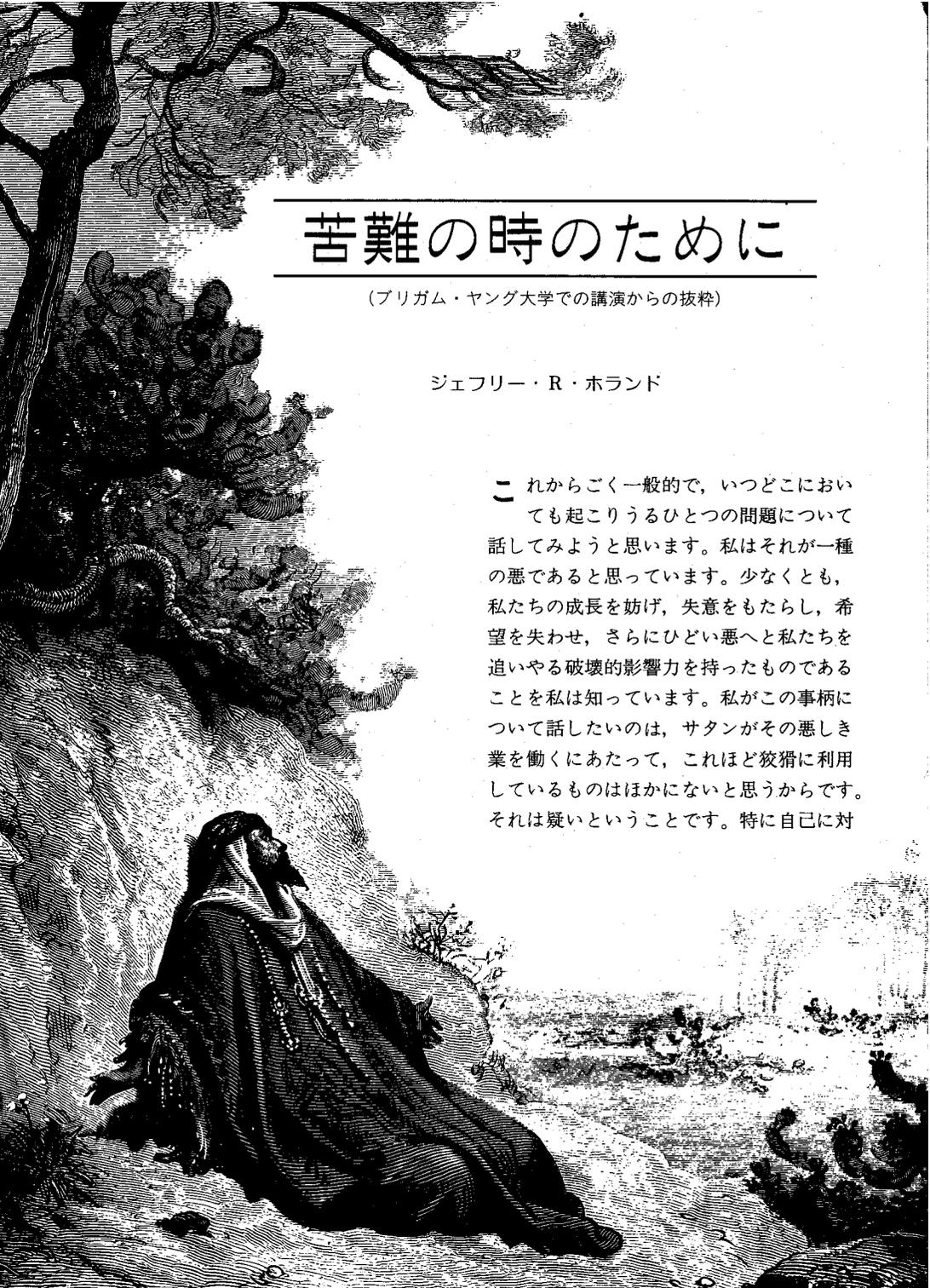
私たちは聖霊を受けています。教会の会員である私たちはそれぞれ頭に手を置かれ、

その儀式がもたらす範囲で聖霊の賜を受けています。しかし思い起こしてみると、私が確認の儀式を受けた時には、聖霊が私のところへ降るようには指示されませんでした。私の方が「聖霊を受けよ」と指示されたのです。私が聖霊を受け、その導きに従うならば、この混乱した時代にあって守

られ、支えられる人々の中に加えられるでしょう。これはみなさん方もそうです。そして聖霊の導きに従った生活をするすべての人々がそのの中に加えられるのです。「もし汝らに備えあらば怖ることなからん。」(教義と聖約38：30参照)まさにその通りです。

ホームティーチャーへの提案

1. 備えをし主を信頼することの祝福について個人的な経験を述べる。家族の人々に、主を信頼することと備えをすることに対する気持ちを述べてもらう。
2. 「聖霊を受け、聖霊の導きに従う人々は……この混乱した時代にあって守られ、支えられる人々の中に加えられるでしょう」というロムニー副管長の言葉について話し合う。
3. 家族が生涯起こり得るいかなる困難に対しても、自らを霊的、情緒的に備えることのできる方法を話し合う。
4. この記事の中に、家族が声を出して読んだ方が良いような引用や聖句、あるいは家族と一緒に読みたいと思う聖句がほかにあるだろうか。
5. 前もって訪問先の家長と打ち合わせておくと、よい話し合いができるのではないだろうか。信仰と備えに関して、定例会リーダーや監督から家長に対して何かメッセージがないだろうか。



苦難の時のために

(ブリガム・ヤング大学での講演からの抜粋)

ジェフリー・R・ホランド

これからごく一般的で、いつでもにおいても起こりうるひとつの問題について話してみようと思います。私はそれが一種の悪であると思っています。少なくとも、私たちの成長を妨げ、失意をもたらし、希望を失わせ、さらにひどい悪へと私たちに追いやる破壊的影響力を持ったものであることを私は知っています。私がこの事柄について話したいのは、サタンがその悪しき業を働くにあたって、これほど狡猾に利用しているものはほかにないと思うからです。それは疑いということです。特に自己に対

する疑い、すなわち失意あるいは失望という事です。

そうかと言って、この世の中に心を悩ますものがほかに全然ないと言っているのはありません。個人として、あるいは地域、国家、国際社会という集団としても、私たちの生活には、確かに幸福を脅かすものが数多く見受けられます。しかし、私が今問題としているのは、新聞で読んだりラジオで聞いたりするものではありません。ニュースの見出しにはならないかもしれませんが、皆さんの日記や個人の歴史について考えれば、大切なものです。そのことを取りあげて、もう少し個人的な問題として述べてみたいと思います。

最初に、作家F・スコット・フィッツジェラルドの言葉を引用したいと思います。「困難が必ずしも落胆と結びつく訳ではない。……落胆それ自体は一種の細菌のようなものであり、ちょうど関節炎が関節が動かないこととは異なるように、落胆と困難との間には何の相関関係もないのである。」(“The Crack-Up”エドモンド・ウィルソン編, p. 77)

問題はだれにでもあります。しかし、落胆という「細菌」は、フィッツジェラルドの言葉を借りるならば、困難や問題の中にあるのではなく、私たち自身の中にあるのです。もっと明確に言うならば、それは暗黒の君であり偽りの父であるサタンから出ているのです。サタンは私たちが落胆の細菌に冒されるのを望んでいます。この細菌は小さい場合が多いのですが、やがて活動を始め、成長し、そして広がっていきます。時には習慣化し、その人の生活や思いの一部となってしまうことがあります。そうな

皆さんは全力を尽くして働き、正しい生活をしているにもかかわらず、負担に感じたり、困難に思ったりする状況に出くわすことがあるかもしれません。それでも勇気を奮ってがんばってください。

ると計り知れないほどの打撃を受けることになります。それは霊にとっても大きな打撃です。と言うのも、落胆することによって信仰、希望、愛という最も大きな宗教的献身がむしばまれるからです。私たちは自分の殻に閉じ込められ、消極的になり、そして人をキリストに近づけるこれらの最高の徳さえも失ってしまうのです。こうして私たちは不幸になり、すぐに他の人々をも不幸な気持ちにしてしまい、結局はルシフェルが笑うことになるのです。

ほかの細菌についても言えることですが、私たちが落胆させるものに対して少し予防のための薬を使う必要があります。ダンテは、こう述べています。「飛んでくるのが見える矢は飛び方が遅いものです。」(「神曲」天国編, 第17歌27行, 平川祐弘訳)

私たちの大切な教えの中にも次のような言葉があります。「而して、天使たちは天の唯中をかけりて大声に叫び、神のラッパを吹き鳴らして言わん『備えよ、備えよ。』」(教義と聖約88:92)

「もし汝らに備えあらば怖ることなからん。」(教義と聖約38:30)

恐れは反対する気持ちからくるものです。

聖典は備えること、予防することが落胆や敗北に対抗する最大の武器であると教えています。

たとえば、皆さんは金銭上の問題で気落ちしているかもしれません。これはほとんどの人がいつかは経験することです。自分と同じような境遇の人がほかにもいることを知れば、いくらか慰められるでしょう。家計のやりくりは確かに大変です。しかし家計が破綻しないように心を配るのは、ほかでもないあなた自身の責任です。

皆さんは、必要な物も十分にない生活をしているかもしれません。自分は貧乏人だと考えているかもしれません。ところで聖書にはこう記されています。「きょうは生えていて、明日は炉に投げ入れられる野の草でさえ、神はこのように装って下さるのなら、あなたがたに、それ以上よくしてください。さらにはずがあらうか。ああ、信仰の薄い者たちよ。」(マタイ6:30)

よく備え、計画し、一生懸命に働き、犠牲を捧げて下さい。明るく、朗らかな気持ちで価値ある事柄に時間とお金とを使うようにして下さい。いつも平静で、自分は全力を尽くしたという充実した気持ちを感じるようにして下さい。一生懸命に働き、熱心に準備するならば、容易にへこたれたり、諦めたり、疲れ果てたりはしないでしょう。もし神と自分自身と自分の将来を信じて努力するならば、皆さんはきっと岩の上に家を建てることができるでしょう。そうすれば将来「風が吹き、雨が降る時」にも決して失敗することはありません。

皆さんは全力を尽くして働き、正しい生活をしているにもかかわらず、つらく困難な状況に遭うことがあるかもしれません。

それでも元気を出してがんばって下さい。皆さんの先人も同じような道を歩んできたのです。

皆さんは自分を人から好かれない、風変わりな人間だと思ってはいませんか。もしそのような人がいたら、もう一度ノアについて読んでみて下さい。そして、紀元前2500年に人に好意を持たれるということがどういうことだったのか確かめて下さい。

皆さんの行く手には、果てることのない苦痛の荒野が広がっているのでしょうか。もしそうならば、もう一度モーセについて読んでみて下さい。パロとの戦いや40年間にわたるシナイ半島の苦しい任務についてよく考えてみて下さい。時間のかかる仕事もあります。それでも引き受けて行なって下さい。聖典に記されているように、いつか必ず成し遂げることができます。そしていつの日か、自分のヨルダン川とも言える試練を乗り越えることができるのです。多くの人々がそれを証明しています。

皆さんは人々から嫌われることを恐れているのではありませんか。この問題については予言者ジョセフ・スミスも同じ思いではなかったでしょうか。それとも健康が問題なのですか。まさに現代のヨブと言うべき人がこの教会をこの神権時代の中で最も活力のある、啓示に満ちた時代へと導いている事実を知れば、皆さんもきっと安らぎを感じることでしょ。キンボール大管長が過去30年間、苦痛や不快感、病気を経験しなかった日はほとんどありませんでした。キンボール大管長が現在あるのは、ある意味で、そうした肉体的な苦勞にめげずに努力したためだけではなく、そうした肉体的な苦勞があったればこそではないかと考え

るの、間違っているでしょうか。病気や死をものともせず、暗黒の勢力に挑み、歩く力すらほとんどない時に「ああ主よ、私は今もなお、健やかです。どうかもうひとつの山地を私に下さい」（ヨシュア14：11—12参照）と叫んでいるこの巨人の犠牲を見て勇気がわいてこないでしょうか。

皆さんは自分には才能がないとか、自分は無能であるとか、あるいは劣っていると考えたことはないでしょうか。もしそうならば、神の予言者を含め、だれもがそのように感じるということを知ればどうでしょうか。モーセも初めは雄弁でないということで、自分の進むべき道に反発しました。またエレミヤは、自分がまだ子供であると思ひ、人々と顔を会わせることを恐れました。

エノクはどうだったでしょうか。私は、皆さんが生涯エノクのことをよく覚えておかれるように願っています。彼は不可能と思える責任に召された時、こう言いました。「われ主の御目に適いしは何の故なりや。われは年行かぬ者に過ぎず、すべての人々われを悪む。われは口重き者なればなり。」（モーセ6：31）

エノクは、信仰の篤い人でした。彼は勇気を奮って、どもりながらも与えられた努力を果たそうと努力しました。ごく平凡で年老いた、何の能力もないエノクが、主のために出かけていったのです。天使は彼のことを次のように書き記しています。

「エノクの信仰、神の民を率いるほどに大いなりければ、民の敵来りて彼らと戦えり。エノク主の言を出しけるに、彼の命に従いて地は震い山は逃げ去りぬ。また河はその流のそとに出て、獅子のほえ声荒野より

聞えたり。されば、すべての国民大いに怖れたり。実に、エノクの言はさほどに力あり。神のエノクに与えたまいし言の力はさほどに大いなりき。」（モーセ7：13）

これがあの何の力もない年老いた、並の人間エノクのなしたことなのです。今やその名は至上の正義を表わす代名詞となっています。今度皆さんが自分を価値のない人間だと思う誘惑にかられた時には、この神の王国の最もすぐれた人でさえも同じような思いを抱いたことを思い出して下さい。私は、イスラエルの諸部族が最も困難な責務に直面した時に、ヨシュアが述べた言葉を皆さんに申し上げたいと思います。「あなたがたは身を清めなさい。あす、主があなたがたのうちに不思議を行われるからである。」（ヨシュア3：5）

もちろん落胆の原因の中には、他と比較して癒すことが難しいものもあります。それは、もっと高い秩序に入る備えができていないことと関連しています。それは清めとは逆行する行為です。この世にあって、あるいは永遠にわたって最も破滅的な失望を味わうことです。すなわち神に対する背罪であり、罪によって固められた失意です。ここで、最も大切なチャレンジは、自分の過ちの重大さに気づいた時に、自分は変わることができ、今までとは違う人間になれるのだと信じることでしょう。それを信じさせまいとすることは、明らかに皆さんを落胆させ、敗北に導くためのサタン企てです。ひざまずいて天父に感謝して下さい。皆さんは教会の会員であって福音を受け入れています。そしてこの福音は、進んで代価を払おうとする者には悔い改めの機会を与える約束しているのです。悔い改

めは不吉な言葉ではありません。この言葉は信仰に続く言葉であり、キリスト教で使われる用語の中でも最も希望を与えてくれる言葉です。悔い改めとはまさに聖典に記されている主からの招きであり、成長、改善、進歩、そして新生を目指すものです。あなたも変わることができるのです。あなたは義にあってあなたが望む人物になることができます。

私が耐えられない悲しみをひとつ挙げるとするならば、それは「どうせ私はこうなんだから」という悲しく哀れな、そして力のない言葉を発することです。落胆について話したいと聞いただけで、私は失望してしまいます。どうか、「自分はこんな人間で

しかない」というような話を私にしないで下さい。私はそのような話をたくさんの人から聞かされました。彼らは自分の犯そうとする罪を「どうしようもない心理状態」という言葉で正当化しようとしたのです。私は「罪」という言葉を広範囲な習慣をも含んだ意味で使いましたが、その中には、表面的には罪のないものであっても、人々に失意と疑いと失望をもたらすものもあります。

皆さんは変えたいと望むものを何でも変える力を持っています。しかも即座に変えることができます。悔い改めるには何年もかかり、時間がかかるというのは、サタンの欺きです。「改めます」と心から言ってい

そしてエリシャが祈って「主よ、どうぞ、彼の目を開いて見させて下さい」というと……。



る時には、悔い改めているのです。もちろん、そこには解決すべき問題もあれば、償いも必要でしょう。しかし、悔い改めが心からのものであって、それが永続するならば、皆さんは残りの人生を有意義に過ごすことができます。またそうあっていただきたいと思えます。

変化、成長、新生、そして悔い改めは、ちょうどアルマとモーサヤの息子たちがそうであったように、瞬時に訪れるものです。たとえ皆さんが大いに悔い改めなければならないとしても、モルモンが若者に対して使った「罪人の中でも最も卑劣な者」という言葉に当てはまるほどの罪を犯したとは思えません。しかしアルマがアルマ書36章の中で自分自身の経験を語っているように、アルマの悔い改めは、驚くほど瞬間的なものでした。

誤解しないでほしいのですが、悔い改めは簡単に何の苦痛もなく、自分の都合のいいようにできるものではありません。それは地獄からの苦き盃なのです。しかし罪を認めることによってもたらされる一時的苦痛が、永遠に罪のうちに留まること以上に耐えがたいものであると人に思わせるのは、ほかならぬその地獄に住むサタンです。サタンはこう言います。「あなたは変わることはできない。あなたは変わらない。変わるには時間がかかり過ぎるし、難しくくてできるはずがない。諦めなさい。降参しなさい。悔い改めはよしなさい。あなたはもう変わりようがないんだから。」これこそ絶望の淵から来る偽りです。皆さん、サタンの言葉を信じないようにして下さい。

聖典を熱心に読んで下さい。そうすればそこに自分が味わったような経験が書き記

されていることがわかるでしょう。そして、霊性と気力とを見いだすことでしょう。またさまざまな問題の解決策と助言を見出すでしょう。ニーファイは次のように言っています。「キリストの言葉は、あなたたちのしなくてはならないことをみな教える。」

(Ⅱニーファイ32：3)

目的と信仰を持って断食し、熱心に祈って下さい。困難と呼ばれるものの中には、悪霊のように「断食と祈り」とによらなければ追いつくことのできないものもあります。

人々に奉仕して下さい。人々に奉仕することが自分自身を救うのです。これは一見、矛盾しているようですが、確固たる神の摂理なのです。

信仰を育てて下さい。「奇蹟の時代はすでに過ぎ去ったと言えるか。天使たちはもはや世の人に現われないということがいえるか。神はすでに聖霊の力を人々に与えることを止めたもうたと言えるか。時が存在する限り、大地がある限り、また救うべき人が一人でも地上にのこっているかぎり、神は聖霊の力を与えることを止めたもうであらうか。よく言っておく、そうではない。……天使が現われて人に導きと恵みとを伝えることもまた信仰によるのである。」(モロナイ7：35—37)

エリシャは予言者のみが持つ力をもって、^{たいじ}対峙するスリヤ人から、いつ、どこで、どのようにして身を守ったらよいかをイスラエルの王に助言しました。当然のこととしてスリヤの王は、自国の軍を進めるに当たり、この予言という問題を取り扱いたいと思いました。その箇所を引用してみましょう。

「王はそこに馬と戦車および大軍をつかわ

した。彼らは夜のうちに来て、その町を囲んだ。……（軍勢が）馬と戦車をもって町を囲んでいた……。」（列王下6：14—15）

もしエリシャに失意の気持ちが生じたとしたら、まさにこの時ではなかったでしょうか。エリシャの唯一の味方といえば、今で言うところの教師定員会会長しかいませんでした。ひとりの予言者とひとりの若者が全世界を敵に回して戦っているのです。若者は恐怖のために体がすくむほどでした。敵に四方を囲まれ、困難と失意、そしてさまざまな問題と重荷が彼の上にのしかかてきます。退くこともできず、目の前に広がる混乱した町をただぼう然と眺めているだけでした。まさに信仰も失わんばかりの状態です。若者は叫びました。「ああ、わが主よ、わたしたちはどうしましょうか。」（列王下6：15）

エリシャは答えました。「『恐れることはない。われわれと共にいる者は彼らと共にいる者よりも多いのだから。』そしてエリシャが祈って『主よ、どうぞ、彼の目を開いて見させてください』と言うと、主はその若者の目を開かれたので、彼が見ると、火の馬と火の戦車が山に満ちてエリシャのまわりにあった。」（列王下6：16—17）

皆さんはイエス・キリストの福音においてこの世と幕の彼方の両側から助けを受けています。そのことを決して忘れないようにして下さい。落胆し意気消沈した時には、——必ずそういう時がやってくると思いますが——眼を開いて見るならば、私たちを守るために火の馬と戦車が猛烈なスピードでやってくるのを目にすることができることを忘れないで下さい。これらの天の軍勢はアブラハムの子孫を守るためにいつでも

皆さんは変えたいと望むものを何でも変える力を持っています。しかも即座に変えることができます。サタンはこう言います。「あなたは変わることはできない」

出動してくるでしょう。

次の天からの約束をもって私の話を結びたいと思います。「誠にまことにわれ汝らに告ぐ、汝らはいまだ幼児にして、父なる神がその御手の中に如何に大いなる恵みを有ちてこれを汝らのために備えたまいしかをいまだなお覚らざるなり。汝らいますべての事に堪うる能わず、さりながら心安かれ。われ汝らを導きて行けばなり。……」

それは、われ汝らの前に先立ちて行くべければなり。われは汝らの右に在り、また左に在らん。わが『みたま』は汝らの心の中に在り、またわが天使らは汝らを囲みて懐き支えん。

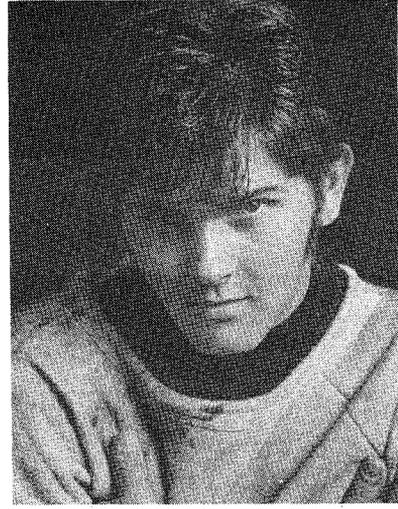
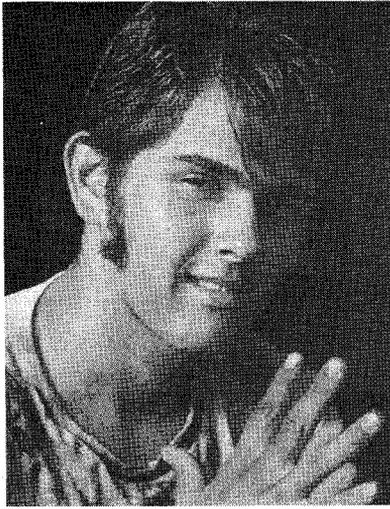
……王国は汝らのものなり。それに属する祝福も汝らのものなり。また永遠の富も汝らのものなり。」（教義と聖約78：17—18；84：88；78：18）

こうして、私たちは、「神の王国」を見いだし、そして高らかにこう歌うのです。

「歌声高めて 神をほめたたえ
高く声あげん すべては善し」

イエス・キリストのみ名によって申し上げました。アーメン。

福を促す心



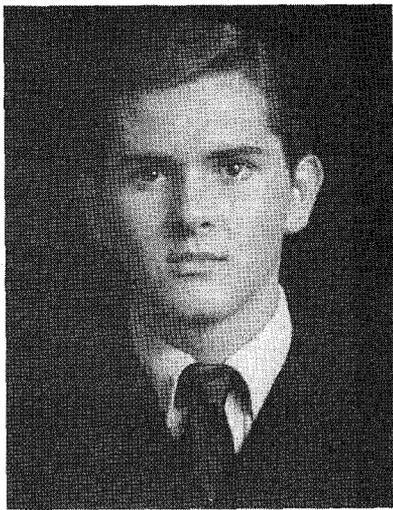
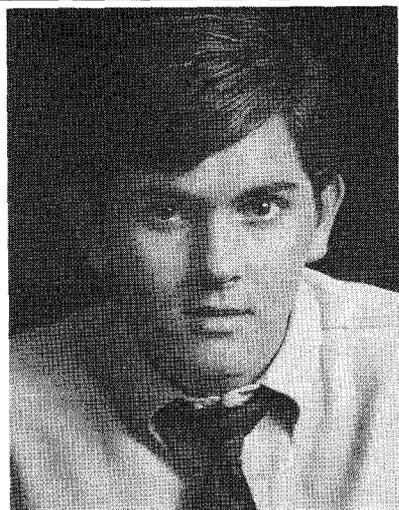
南 アメリカのある村で、訪問者の一団がガラスの破片やブリキかんのふたで羊の毛を刈っているインカ人の子孫たちを見ていました。その訪問者たちは地元の指導者を数人招いて、村の中央で金属性の大ばさみを使って羊の毛を刈る実演をしました。村人たちは興味深く見入りながら、その新しい道具を使うと同じ時間で10倍も多くの羊の毛を刈ることができることを知りました。彼らは物々交換でこのはさみをいくつか手に入れ、それ以来ずっとそのはさみを使うようになりました。効果的な教えが大きな変化をもたらしたのです。

同様に教会においても、効果的な教えは子供たちや若者、大人たちの生活の中に価

値ある積極的な変化をもたらします。では福音を教える主な目的は何でしょうか。何を目標とすべきでしょうか。クラスの生徒の頭に、「情報を注ぎ込む」ことが目的ではありません。教師にどれだけ知識があるかを示すことでも単に教会や福音についての知識を増すことでもありません。教会における教えの根本的な目標は、人々の生活に価値ある変化をもたらす手助けをすることです。福音の真理と原則について考え、感じ、感じたことを行動に移すよう励ましを与えることです。

あまりにも多くの教師が福音についてのみ教え、福音の原則を人々の生活に応用させるために段階を踏まなければならないこ

音の教え



とを無視しています。原則を教えるだけでは十分ではありません。その原則を取り入れさせ、実践に導くことが真の教えに必要なことなのです。

効果的な教育を行なうには、まず教室に入って来る生徒の知識の程度すなわち彼らがどれだけ理解して来ているかを知らなければなりません。また、もし生徒が部屋を出る時に何らかの点で変わっていなければ、その時間は無駄に費やされたということをお認めなければなりません。生徒が、レッスンの影響を受けることにより態度に少しでも良い変化を見せて部屋を出て行くこと、また福音の原則に対する知識を深め、それを日々の生活の中で実践していくことを期

待したいものです。

効果的でしかも正しい学習には、少なくとも次の3つの段階があります。

1. 知識を増す。福音の教えを詰め込み過ぎると、知識が増すだけでそれ以上の成長がありません。このような知識は大切ですが、それだけで十分ではありません。教会の歴史や原則について知ることは神の王国における進歩に欠かせないものです。また素晴らしい生活をするための基本でもあります。しかしそれらはほんの始まりにすぎません。

2. 思いを深め、態度を変える。生徒が福音や原則に対して積極的な態度をとることは大切なことです。したがって善に対す

る生徒の思いを深めさせ、証を強めさせる教師は正しい目標に添っていると言えます。

3. 実践する。多くの点で、この3番目の段階は最も大切です。神権会であろうと補助組織であろうと、あるいはセミナーやインスティテートのクラスであろうと、福音を教える際には、各生徒が自分の生き方を変えて生活の中に価値ある変化をもたらすよう援助しなければなりません。

たとえばレッスンは祈りに関するものの場合、有能な教師は生徒が祈りとは何か、なぜ祈るのか、正しい祈りとはどのようなものかといった事柄をわかりやすく教えるはずで、同時に、生徒自身に祈りに対してより積極的な態度をとらせ、祈りの必要性を感じさせることでしょう。そして生徒にきょうもあすもそして毎日祈るように勧めるのです。

効果的な福音の教え方の目標が、人々の生活に価値ある変化をもたらすことであるということがわかりました。では教師はそれらの変化をどのようにしてもたらすことができるのでしょうか。

第一に、有能な福音の教師は、生徒たちにレッスンや原則またはその中で強調されている概念をよく理解させます。断食に関するレッスンであれば、まずその原則は何か、その由来は何か、そしてそれが人々の生活にとってどんな意味があるかを生徒に理解させるのです。こうして何のためになぜ断食するのかを理解すれば、生徒は断食をもっと喜んで生活の中に取り入れるようになるでしょう。反対にその原則がよくわからなければ、彼らはほとんどあるいはまったく関心を示さなくなるでしょう。

人は未知のものに対してはちゅうちょしたり恐れさえ抱くことがあります。理解を増すことによって行動への道が開け、前進する備えができるのです。ですから福音について教えることは、行動へ導く重要なステップにはなりますが、それ自体は目的ではありません。

第二に、有能な教師は、生徒の思いや確信を深めさせることによって彼らを行動へと駆り立てます。ここでもまた、生徒が断食は他の人々だけでなく断食をする本人にとっても祝福であるということを感じ取れるように導くならば、その教師は効果的な教えをしていることとなります。

教師にできるひとつの方法は、自分の証を述べてクラスの生徒に確信を与えることです。個人の体験に基づく証は人々の生活に大きな影響を及ぼします。ニューヨークや大阪で万国博覧会が開かれた時、モルモンの展示物を見た多くの人々が教会に加わりました。大勢の人が証しているように、彼らに最も影響を与えたのは美しいパビリオンを案内してくれた後に聞いた宣教師の誠実な愛ある言葉でした。宣教師たちはこう証したのです。「私は福音が真実であることを知っています。このことを皆さんに心から証したいと思います。皆さんが福音を学んでそれを実践なさるならば、同じような証をお受けになることでしょう。」

教師は、所かまわずやたらに証するのではなく、適切な場合にのみ証を述べるべきです。個人の確信というものは、特別な時に誠実な思いで分かち与えてこそ人々の生活に大きな意味をもたらすのです。

クラスの生徒の思いに影響を与えるもう

ひとつの方法は、教えようとしている原則や概念を例証している興味深い話や経験を話すことです。生徒の多くは、クラスで聞いた劇的な経験に影響を受けて自分の生き方を見つめ直しています。教師がそのような経験を話すと同時に、できれば生徒自身にも個人の活動経験や証を述べてもらうようにします。

ある十代の男の子は、知恵の言葉に関する神権会のクラスに出た後、タバコをやめました。クラスの中で教師は、自分の兄がタバコをやめた時の体験を生き生きと話して聞かせたのです。その話の中で彼はタバコ好きの人でもタバコをやめられることを現実的に語り、やめることによって得られる利点を明らかにしました。

有能な教師は、福音の原則に従った生活に関して、思いや確信を深めるような経験や話をしてレッスンを豊かなものにしようと努めるものです。

第三に、有能な教師は生徒にレッスンの中で強調されている事柄を実践させます。これは特別な割り当てをすることによって達成できます。私たちは何度もこの段階まで到達してはいますが、いつもそこで立ち止まってしまいます。私たちにとって本当に必要なのは、生徒が学んだ原則を実際のために試みられるよう、その道を作ることです。

この段階がいかに重要かは、教会に改宗したある5人の家族の例に表われています。この家族の近辺にはたかさんの末日聖徒が住んでいたため、彼らは福音についていろいろ知っていました。その後、彼らは伝道部のある地域へ引越してきました。そこで

はモルモン^{*}の宣教師が彼らを教会に招待しました。間もなくこの家族はバプテスマを受けました。「どうしてももっと早く改宗しなかったのですか」とある人に尋ねられた父親の答えはこうでした。「今までだれからも改宗を勧められたり、教会へ行ってみるよう勧められたことがなかったのです。」

実践を促すような割り当てをするのも効果があります。たとえば、12歳の子供には毎日祈ること、什分の一を納めること、困っている隣人を助けるなどの「良い行ないをする」ことを割り当てとして実行させます。これらの割り当ては現実的で達成可能なものにすべきです。人は価値あることを実際に経験すると、そのことを簡単には忘れないものです。価値あることを実践させるということは効果的な教えに欠かせない非常に重要なことです。また報告させたり、励ましを与えたりしながら、割り当てを忘れずに続けさせることも大切です。

有能な教師は、これらの段階を実践させていく上で重要な役割を占めます。そして人々の生活に価値ある変化をもたらします。ヘンリー・ブルックス・アダムス^{*}が言っているように、確かに「教師の及ぼす影響は永遠であり、そのとどまるところを推しはかることはできない」のです。

*注：

ヘンリー・ブルックス・アダムス (1838—1918) 米国の歴史家、作家

学習は 万人の務め

元宗教教育担当副理事
ジョー・J・クリステンセン

私たちは真の学生であるべきです。それ以外の何者であってもなりません。大学でも、インスティテュートやセミナーでも、神権定員会でも、家庭の夕べでも、あるいは日曜学校でも、宗教について学ぶ場合は、単にそこに出席するだけでなく、他のいかなる分野にも増して真剣になって取り組む必要があります。そこで学ぶ事柄には、私たちが知的にも霊的にも持てる限りのものを注ぎ込んで努力する価値があるのです。聖職者のいないこの教会で、もし私たちがイエス・キリストの福音を学習することに長けていなければ、いったいだれがそれをするというのでしょうか。イスラエルの長老が学識の深い神学者にならなければ、だれがなるといえるのでしょうか。母親である皆さんが、あるいはこれから母親になる皆さんが、子供たちに正しく福音を教えなければ、だれがそれを教えるのでしょうか。宣教師の皆さんが主から託されたメッセージを自ら学ぶことをしなければ、だれがそれをするというのでしょうか。私たちは多くのつらい経験を通してだれにでもわかる当然のことを理解します。それは、自分が知らないことを人に教えることはで

きないということです。

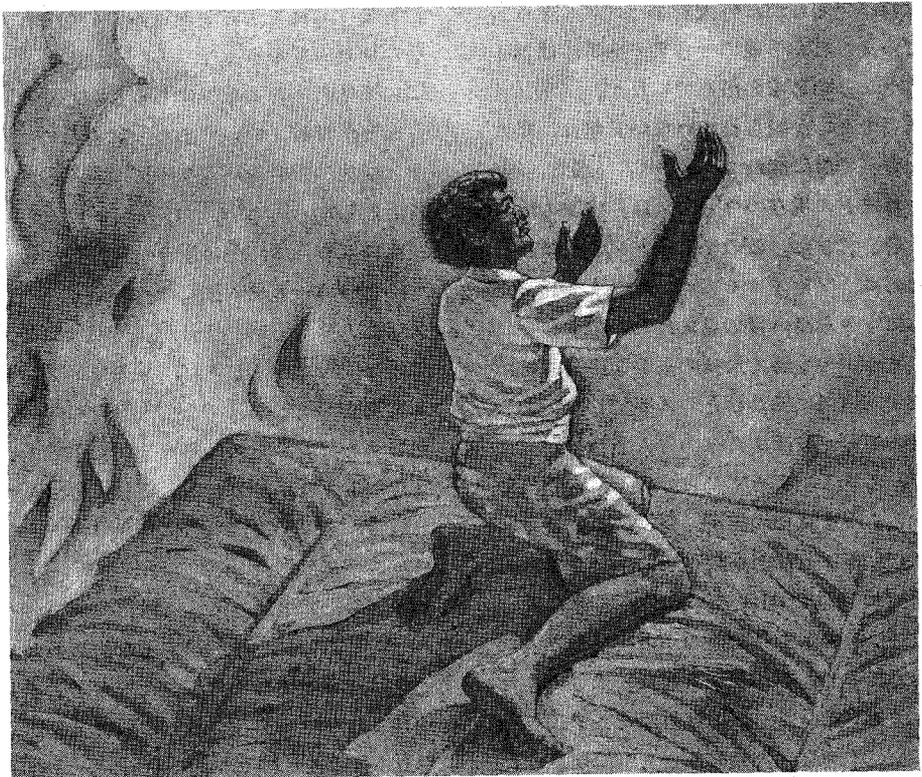
ある人がこのように言いました。「もし真理を効果的に教えなければ、教会は一代で消滅してしまうであろう。」各世代は自分に続く世代に真理を正しく教える責任があるのです。

世の人々の道徳心は低下の一途をたどっていますが、その主な原因のひとつに、真理の原則に基づく宗教教育が行なわれていないことが挙げられると思います。しかし、末日聖徒イエス・キリスト教会にはそれがあります。しかも、私たちが、私たちの指導者が、固い決意をもって取り組んでいます。様々なプログラムを計画し、組織し、金銭や時間という資産を投じています。ですから、私たちはいかなる人に対しても堂堂と申し開きができるのです。教会員は子供を連れて遠い道のりをやって来ますが、それは初等協会や早朝セミナー、教会のスカウト活動、日曜学校、聖餐会、定員会活動などに出席させるためです。また教会では両親や教師が教える際に利用できるように、数多くのテキストを発行しています。さらに、セミナーやインスティテュートをはじめ、小中高等学校、短期大学、総合大学なども設立して運営しています。

なぜそのようなことをするのでしょうか。それは、真理を学び教えることができるようにするためです。また、みたまが福音の永遠の真理についてすべての人の霊に証して下さるような環境を整えるためです。このみたまこそ、真の「宗教教育」の基本となり特質となるものです。みたまなしに教えることはできません。教師と生徒がみたまを受けていれば、失敗することはないのです。私たちの進むべき道は示されました。目標は定められているのです。

オパポ： その信仰の力

カール・フォノイモアナ



私 はこれまでずっと、オパポを信仰の厚い熱心な働き者の祖父、もちろん人々に大変愛された私の祖父という考えを持っていました。しかし成長するにつれて、私は彼が単に私の祖父というだけではなかったことを知ったのです。彼は、歴史上のある時期に、非常に重要な地位にあった人でした。

祖父は1859年、サモアの村サバイのフォガチュリに生まれましたが、祖父の幼年時代についてはあまり良く知られていません。貧しいその島の中でも、フォガチュリは特に貧しい村でした。その上、オパポの家族は特に克服しがたい大変なハンディを抱えていました。母親のマリア・トアイはフォガチュリの名家の出身でしたが、フォノイモアナとしか知られていない父親は、嵐に出会って岸に流れついたウペア（西方へ800キロほどの現在のウォリス島）出身の「よそ者」でした。彼の先祖はトンガ人だったために、フォノイモアナは死ぬまで村人たちにうさん臭い目で見られたのです。

オパポの生涯で最初の重要な出来事は、彼が若い頃に見たひとつの夢でした。その夢の中で、彼はふたりの外人宣教師が村にやって来て、まっすぐ自分の家に入って来るのを見たのです。夢はそこで終わりましたが、それから数年後にふたりの末日聖徒の宣教師が彼の家にやって来た時、彼にはそのふたりが夢の中に出て来た人たちであることがわかりました。そしてみたまが強く働いて、彼に宣教師たちのメッセージが確かなものであることを確信させた

のです。

この人がサモア人の中で偉大な業をなすための準備はすっかり整っていました。

記録によると、彼と妻のトアイは1890年にバプテスマを受け、それから2年後にサモア伝道部が開かれています。1890年までに、サモア人たちはすでにキリスト教の教義に触れていました。まずロンドン宣教師協会が1830年に伝道を開始し、その後間もなくカトリックやメソジストによる伝道が行なわれました。救い主に対する深い信仰のゆえに、人々はみたまの賜や奇跡を身近に感じていました。しかし、私の祖父が福音を受け入れて苦闘を続けるこの小さな教会に加わってから、キリストを信じる人々に約束されている数々のしるしが、並々ならぬ方法で彼についてまわり始めたのです。それは他の信仰深い人々の間にも見られたことでした。

皮肉にも、当時救い主を礼拝し愛するようにと勧める人々の間に激しい敵意がありました。モルモンたちは迫害や嘲笑に耐えなければならず、彼らはジョセフ・スミスが農家で育ったということで「カウボーイ」というあだ名さえつけられました。そのような中でオパポは恐れることなく信仰を保ち続け、末日聖徒たちの間で指導者とみなされていました。

1904年、彼と数人の人々は、ウポルの山あいにはサウニアツ（「前進するための備え」）と呼ばれる聖徒たちの小さな安らぎの場を作りしました。ところが最初の教会堂が建てられて間もなく、そのすぐ後ろにあった小さ

私は、自分の祖父についてあまり良く知りませんでした。しかし今はオパボの孫であることに深い感謝の気持ちを覚えています。彼の信仰のおかげで、私の信仰も強められています。

な料理場が火事になりました。人々は川から水を運んで消火にあたりましたが、その努力のいかなく火は急速に燃え広がり、教会堂も危険にさらされました。その時、人人はオパボが教会堂のてっぺんに登って屋根の横梁にまたがっているのに気づきました。彼は右腕を上げると天を見つめて言いました。「父よ、我々は小さな家は惜しみません。しかし大きな家を失うことはできません。イエス・キリストのみ名と聖なる神権の力により、風向きが変わるようにと命じます。」

その通りになりました。小さな家は焼け崩れてしまいましたが、教会堂は救われました。そして教会堂が守られただけでなく、サウニアツの聖徒たちの信仰がこの大変な事態にあって強められたのです。

オパボとトアイも個人的な試練から免れることはありませんでした。彼らの14人の子供のうち11人は成人する前に亡くなりました。しかし、そのようなことを通して彼らはさらに謙遜になり、敬虔さと勤勉さを増していったようです。オパボは午前5時

と午後5時を祈りの時間としていました。それ以外の時間にもたびたび祈りをすることがありました。そしていつも自分の家族のためだけでなく、他の人々、特に未亡人や父親のいない人々のために祈りを捧げました。

彼はまたアメリカ人の宣教師の同僚として他の地域へ伝道に行くなど、何度か伝道の業に携わりました。ある時、オパボと古くからの親友のエリサラ、そしてふたりのアメリカ人宣教師のうちのひとりと、マヌアという島へ出かけました。島に到着してすぐ、彼らはその地方の王様ツイマヌアが、人人に、いかなる方法でも末日聖徒を受け入れたり助けたりしてはならないという命令を出していることを知りました。それに従わない場合は即刻、投石の刑に処すことになっていました。しかし宣教師たちはきっと成功するという確信を持ち、海岸に転がっているココナツを食べ、ほら穴に寝泊まりしながらその島に2カ月間滞在しました。彼らは蚊に刺されないように葉で頭と顔をおおいました。毎晩ひとりずつ交替で、他の

その地方の王様ツイマヌアが、人々に、いかなる方法でも末日聖徒を受け入れたり助けたりしてはならないという命令を出していることを知りました。それに従わない場合は即刻、投石の刑に処すことになっていました。

人が頭や顔に葉をかぶせるのを手伝い、自分は助けが得られないまま一晩中蚊に悩まされながら寝るといった状態でした。

このようなひどい状態が数週間続いた後、オパポは不思議な経験をしました。目を覚ますと、目の前にできたの料理があるので、はたして人間からのものか神からのものかわかりませんでした。ココナツだけの食事が何週間も続いた後だけに、この上なく感謝しました。彼らの滞在期間も終わりに近づいた頃、また同じようなことがありました。ひとりの年輩の女性が彼らに食事を届けてくれたのです。彼女はこのような行為のために殺されるのなら死んでもかまわない、ツイマヌアを恐れてはいないと言いました。

数週間後、あらゆる道を歩き尽くした後、宣教師たちは立ち去る準備をしました。オパポとエリサラは、儀礼的に直接ツイマヌアとその民に語りかけ、悔い改めをしなければ彼らは神の怒りと力を感じるに違いないと警告しました。そして最後に、長いボートに乗りこむ前、オパポは村のはずれに

立ち止まり、その島に対する証として足のちりを払い落としました。数週間後、強烈なハリケーンが島を襲い、大勢の人々が死んだ上に畑の作物が全滅し、一軒の家を除いてすべての家が崩壊しました。その一軒の家というのは、宣教師たちを助けたあの年輩の婦人の住んでいる家でした。

奇跡が信者の信仰を強めるということは真実ですが、それが必ずしも不信者たちに信仰を抱かせることにはなりません。1974年になって初めてマヌアに教会の支部が実際に組織されました。一方、オパポの話聞いた聖徒たちは、その出来事を聞いて信仰を強めました。

その後間もなく、オパポとトアイは家族を連れてサウニアツからツツイラ島に移りました。それは、実際にハワイに行ってその聖徒たちと共に生活するための準備となるものでした。ツツイラでの迫害は特にひどいもので、そのためにオパポは大きな悲しみを味わいました。それでもなお、彼の信仰は揺るぎませんでした。ある時、彼と親友のピネムア・ソリアイがパゴパゴに

向かって歩いている途中、バスが通りかかったので止まってもらおうと手を振りました。バスが止まったので近づいて行くと、運転手は彼らがモルモンの宣教師であることを知るやいなや、急にアクセルを踏み、ふたりを砂ぼこりの中に残して行ってしまいました。ソライイ兄弟は沈んだ様子でオパポに言いました。「これじゃ、町に着くまでにずいぶん長くかかりそうだね。」するとオパポは悲しげに答えました。「いいや、あの人よりも早く着くさ。」そこから1.5キロほど行った所で、ふたりは事故現場に出くわしました。さっきのバスがトラックと正面衝突して、バスの運転手が亡くなっていました。

ソライイ兄弟とその家族は、彼らの住むツツイラのヌーリイという小さな村で唯一の末日聖徒でした。ある時、彼はオパポに自分の子供や家、財産、友人たちを祝福しに来てくれるように頼みました。その場に会員ではないひとりの裕福な未亡人サラタイマ・ブアイロアという人が来ていました。彼女は、夫から受け継いだ土地を夫の家族に取られてしまうというので悩んでいました。オパポの祝福に心打たれた彼女は、自分にも祝福してくれるようにと頼みました。しかし、オパポは彼女が会員ではなかったのであまり気が進みませんでした。

それから彼女は教会の教えを学び、バプテスマを受けました。そして再び彼の所にやって来て祝福を頼みました。その祝福の中で、オパポは彼女が夫の親戚たちから何の妨害も受けず、無事に土地を受け継ぐこ

とができること、また忠実であるならば主の器となってアメリカンサモアの教会の使命を押し進めるであろうと約束しました。

1950年代の初めに、その祝福は成就しました。教会は彼女の土地のいくらかを購入し、そこに高校や教員宿舎、広大な福祉農場、ステーク部センターを建設しました。

1926年、オパポとトアイは私の父テイラを、自分たちの到着に備えさせるためにハワイに送りました。2年後、教会は私の祖父母にハワイ神殿でサモア人のための神殿の儀式をするようにと召しを与えました。1935年、私の祖母は肺炎のため70歳で亡くなりました。教会と夫を常に心から支持して生涯を閉じた彼女は、ハワイのライエに埋葬されました。

トアイと同様に、オパポも81歳の誕生日を前にして肺炎で倒れ、彼女のそばに埋葬されました。

私は、自分の祖父についてあまり良く知りませんでした。しかし今はオパポの孫であることに深い感謝の気持ちを覚えています。彼の信仰のおかげで、私の信仰も強められています。サモア諸島の教会歴史上最も困難をきわめた時期に、祖父の示したいくつかの賜はサモア人たちに、福音が真実であること、神権が神の力であること、そして救いの計画が確かに私たちの従うべき道を教えてくれるものであることを証したのです。祖父の家族だけでなく、教会のすべての聖徒は祖父の残した祝福を遺産として受け継ぐことができるのです。

朝鮮戦争の時のことです。伝道から帰ったばかりの私は、ジョージア州のキャンプゴードンにある軍の通信隊に配属され、そこで厳しい基礎訓練を受けました。私と一緒に訓練を受けた人の中には、50人の末日聖徒がいて、帰還宣教師も9人いました。私たちはさっそく、隊の娯楽室を使って聖餐会を開く許可を求めました。それを聞いて指揮官はたいそう驚かされた様子でしたが、私たちの申し出を認めて下さっただけでなく、娯楽室を掃除して集会の準備を整えておくように手配して下さい、食堂のコップやパンを聖餐会用に使う許可まで与えて下さいました。

軍隊ではノミや睡眠不足に悩まされ、台所の手伝いや警備勤務、次々に下される命令などに追われていましたから、毎週日曜日の霊的で安らかな集会は、まさに喜びの一時でした。ところがある日曜日のこと、粗暴でならした軍曹が聖餐会に出席したため、集会にはいつもの落ち着きがありませんでした。その軍曹は教会員ではないのですが、兵舎から末日聖徒の新兵たちを行進させてきて、そのまま椅子に座って集会が終わるのを待っていたのです。話し手に注意を払って聞いているようには見えませんでした。しかし、最後まで平然とした態度で座っていました。集会が終わると新兵た

ちは軍曹に連れられて兵舎に戻り、次の週からは自分たちだけでやって来ました。

私たちは卒業試験を2、3週間後に控えていたので、軍曹のことはすぐに忘れてしまいました。その試験は3日間にわたる実戦演習として行なわれ、2日目に私たちの隊は「敵」の攻撃を受けて、何人かが捕虜になりました。また、聖餐会に出席したあの軍曹が、行方不明になったという報告がありました。

その夜、私たちは小さな火を囲んで携帯食を食べていました。するとかすかな物音がしました。私たちは食物を投げ捨てると、あわててライフルを構え、「敵」の攻撃に備えました。

物音がしたあたりから、だしぬけに声がありました。「お前たちの中に、ジョセフ・スミスを知ってるやつはいるか。」私たち末日聖徒は互いに顔を見合わせました。敵のわなかもしれません。教会員でない人は、もちろん何のことかわかりません。ついに勇気のあるひとりの兵士がどなり返しました。「知っているぞ、ジョセフは神の予言者だ！」

するといかにもうれしそうに「やっぱり味方だ！」と叫ぶ声が聞こえました。そして暗闇の中からのあの軍曹が姿を現わしたのです。

「合言葉は……」

J・リン・ブラッドフォード





ヘイスティー

テリー・デイル

「ついに来るべき時が来た。」ある日曜日の聖餐会終了後、監督からオフィスに来るように言われた私は、とっさにそう思いました。教師定員会の会長に召されるのに違いないと確信し、喜びでいっぱいになったのです。ワード部の会員たちからおめでとの言葉を贈られている自分の姿を想像したり、母がどんなに喜ぶだろうなどと考えたりして、有頂天になってしまいました。

監督は大変陽気で、常に笑顔を絶やさない人でした。その日彼のオフィスで向かい合って話しながら、いつもと変わらない笑顔だけど、この会話は自分にとって重要なものとなるに違いないと心の中で考えたりもしました。

「ところでスティーブ、君にひとつ責任を受けてもらいたいんだよ。」監督がそう言って話の核心に触れてきました。心臓の鼓

動が高なり始めたのが感じられました。

「ヘイスティー・マクファーランという老人のことなんだが、何とか彼を助けられないかと思っているんだ。そこで、君に彼の『よき隣人』になってもらえないだろうか。君も知っての通り、彼は不遇な人だ。友達が必要だと思うんだ。ヘイスティーは教会の会員ではないが、神様の愛は平等にすべての人の上に注がなければならないはずだから、神様の真の教会の会員である私たちがそれをする義務があると私は思うんだよ。特権と言った方がいいかも知れないね。」

たぶん私はその時、驚いたような表情をしていたと思います。「君はヘイスティーを知っているだろう、スティーブ。」監督はそう言って念を押しました。

「はい、知っています」と答えながら、私は2週間ほど前のことを考えていました。

友達と一緒にその老人を笑いものにしたのです。

自分の期待が大きはずれたことと、その老人をあざ笑ったことに対するうしろめたさが入り混じった複雑な気持ちでした。でも私は努めてそれを隠すようにして、「彼は町はずれに住んでいて、まるで世捨て人のような生活をしています」と答えました。

「その通りだ。」そう言うと監督は、週に2、3度この老人を訪問するように言いました。

「はい。」この短い言葉を私はやっとの思いで口にすることができました。監督は私の気持ちをすべて見通していたのでしょう。身を乗り出すようにして私の顔をのぞき込むと、こうつけ加えました。

「スティーブ、もしあまり気が進まないなら、はっきりそう言っていていいんだよ。」

「もちろんやります。」ため息混じりに私がこう答えると、彼はいつもの笑顔に戻って「それならいいんだ」と言い、次のようなことを私に話してくれました。

「君が彼にしてあげられることはたくさんある。薪割り、食べ物や毛布など彼が必要だと思われる物を備えたりして彼の友達になるんだよ。君のお父さんはもうこのことを知っていて、喜んで助けると言っていて下さっている。それに天のお父様がいつも助けて下さることも忘れないようにね。」

「はい、わかりました」と私は答えました。

私はその時15歳でした。ほかにやりたいことはたくさんありました。フットボール、ハンティング、魚釣り、ほかの子供たちがすることはみんなやってみたい年頃でした。しかし、監督にやりますと言った以上、全

力を尽くさなければなりませんでした。

ヘイスティーは、アイダホ州の私が育った村から少し離れた山のふもとの、小さな丸太小屋に住んでいました。ある日の午後、学校が終わってから彼を訪ねようと思ひ、私は長い道のりを歩き始めました。松の木立の下を歩きながら、その松の木の本一本が彼の孤独な生活を物語っているように思えました。

毎年クリスマスのシーズンになると、ヘイスティーは町の保安官の計らいで、ホテルの風呂をただで使わせてもらっていました。たぶんそれが1年を通じて彼が使う唯一の風呂だろうと、町の人は話していました。海賊のように髪を伸ばし、黒い眼帯をしたヘイスティーは、子供だけでなく大人にとっても、格好のからかい的でした。「彼はきっと僕の顔を覚えているに違いない。」私は家に近づくにつれてこわくなっていききました。

ドアをノックしましたが、返事はありません。もう一度ノックしましたが、やはり返事はありません。彼は確かに家の中にいるはずですが、どこにも行く所がないのですから。「ヘイスティー」かすれるような声で呼んでみましたが、まだ返事はありませんでした。どのくらいドアの外に立っていたでしょうか。とにかく中に入ってみることにしました。カシの木でできた厚いドアは、きしんだ音を立てて開きました。

「ヘイスティー。」名前を呼んでみました。「ヘイスティー、いるの。」かすかな物音が聞こえたように思ったので、ドアのすき間から頭だけ入れて中を見回しました。中は暗く冷え冷えとしていました。ベッドの上に横たわっているヘイスティーの姿が目に映りました。薄汚れた毛布はボロボロ

口でした。一日中何もせず、ただ横になっているようでした。

心臓の鼓動はますます激しくなります。私はゴクリとつばを飲み込むと、思い切って「ヘイスティー、何か私にお手伝いできることはありませんか」と恐る恐る聞きました。そして名前を言い、末日聖徒イエス・キリスト教会の監督からの依頼で来たことを告げました。彼は何も答えませんでした。長い沈黙の時が流れました。私は次第に不気味になってきました。「ヘイスティー、火が消えているよ。」それでも何の反応もありません。いたたまれなくなった私は、外に出て斧と木の切株を見つけ、薪割りを始めました。「僕はここで何をしているんだ。どうしてこんなことをしなければならぬんだ。」こんな言葉をつぶやきながら斧を振り下ろしていると、「つぶやくのをやめよ」という声が聞えてきました。「あの老人は寒さと孤独に苦しみ続けている。あなたは彼を助けることができる」とその声は続きました。

私はもう一度家の中に入り、火をおこしながら話題を捜して彼に話しかけました。でも彼は耳をかそうとはしません。私は、きれいでふかふかの毛布を持って来ましようと言いました。翌日さっそくそれを持って訪ねました。それから後は、一日おきにヘイスティーの家を訪問し続け、数週間が過ぎました。その間にヘイスティーは少しずつ話すようになっていきました。ある日、少し話した後で、「どうしてここへ来るんだ」と彼が私に聞きました。「わしのような年寄りの病人のところに来るよりもしろいことがたくさんあるだろう。」そう言うとヘイスティーはにっこりと笑って、「だが、来てくれるのはうれしいよ」と言

ったのです。

私たち家族は、ヘイスティーを感謝祭のディナーに招待しましたが、彼は姿を見せませんでした。そこで私たちは食事を彼の家まで運んで行きました。感謝の言葉のかわりに、彼の目から涙がこぼれ落ちるのが見えました。その後も訪問を続け、私は彼が昔、羊飼いだっただことや、妻子を原因不明の高熱で失ったことなどを知りました。絶望のあまり彼は、自分自身を世間から隔絶し、国中を放浪して歩いたのです。悲劇は続き、顔にできた腫瘍のために片目を失いました。そしてその頃から人々は、彼をあざけり始めたのです。しかし、私にとってこの老人はもう醜く怖い存在ではなくなり、学校が終わるのを待ちかねるようになっていました。

そしてその年のクリスマスに、私たち家族は再び彼を食事に招待しました。当日、招きに応じて我が家を訪れた彼を見て、私たちは大変驚きました。きれいな背広に身を包み、にこにこ笑って立っているのです。

ヘイスティーは再び幸せを見つけました。自分が必要とされていることを知ったからです。

食事を終えた時、彼は深々と頭を下げ、私たちに向かってこう言いました。「この家族の皆さんは本当に素晴らしい人たちです。私はこれまで長い間、すきんだ生活を送ってきました。しかし、皆さんの愛が私をすっかり変えてしまいました。心から感謝しています。」

彼のこの言葉を聞いた時、私の胸の内にともっていた小さな火が大きく燃え上がるのを感じました。



闇の中から

トーマス・J・グリフィス





ワード部の断食証会の時のことでした。

若い人が何人が立って主をほめたたえ、受けた祝福について証しました。そしてその後でひとりの老人が立ちました。顔には苦勞を物語るしわが刻まれ、髪は老齡のため真っ白でした。しかし、その声は霜の降りた朝の冴え渡る鈴の音のように澄んでいました。「私は神が生きてましまして、人生の道々で私たちを導いていらっしやることを知っています。私がきょうここにおりますのは、子供の頃の私の祈りを神が聞きたまい、私が歩む時にその道を照らして下さったからなのです。」

彼のこの言葉を理解するためには、ある12歳の少年が一人前に仕事を始めた遠い昔にさかのぼらなければなりません。少年はウェールズの片田舎の炭鉱の村に住んでいました。そこでは男という男はみんな採炭所で働いていました。少年はあと数週間で12歳になり、村の他の少年たちと同様に採掘所に出ることになっていました。彼は、どこにでもいるようなごく当たり前の男の子で、家族を助けるためには学業を断念して働かなければならないということをよく知っていました。ところがある朝、学校に行く途中、彼の人生に大きな影響を与える

ある出来事が起きたのです。それは恐怖というものをひしひしと感じさせる事件でした。

炭鉱夫が住む住宅の方に向かって小さな行列が丘を上がって来ました。ふたりの男が担架を運び、ひとりが先頭を歩いていました。皆炭塵で顔が真っ黒に汚れています。担架の上には死体が横たわっていました。茶色の毛布に包まれた小さな死体でした。だれかが尋ねました。「こんどはだれなんだい。」「デービー・エドワーズだよ。落盤にやられたんだ。かわいそうにな。」前の方にいた男が答えました。

少年は再び学校への道を歩き始めました。しかし彼の頭はデービー・エドワーズのことで一杯でした。死んだデービー・エドワーズと少年は、一緒に丘を歩き回ったり、ニディズリン山の雑木林で栗を集めたり、グイドン川の土手で野生のブラックベリーを摘んだりしたものでした。ハリエニシダの茂みが途切れて森林が広がるところに立って、一緒に春のおとずれを告げるカッコウの、憂いを帯びた鳴き声に耳を傾けたりもしました。

「ああ、ふたりで過ごした日はもう帰ってはこない。デービーはもうすぐランバン



千の丘の墓に葬られるんだ。今度は僕が採炭所へ行く番だ。」少年はしみじみ思いました。生まれて初めて恐怖というものを体験したのです。それでも彼はその恐怖を口には出さず、胸におさめていました。

12歳の誕生日がきました。彼は父親から次の月曜日に採炭所で働くことになること知らされました。土曜日の午後、彼は父親と一緒に村に下りて行きました。そこで父親は彼を小間物屋に連れて行き、彼にモールスキンの作業ズボンとウェールズ地方特有のネルのシャツを買ってやりました。また食物と装備を入れるトミーボックスと茶かん、それに炭塵が足をつたって上がってこないよう膝下でズボンをしぼる皮のひもを買って与えました。

月曜日の朝は冷たい雨まじりの天気でした。しかし、少年の心はもっと冷え冷えと

していました。彼は熟練した鉱夫であるデイ・ジェンキンスの相棒として働くことになっていました。経営者側は父と息子が一緒に働かないように勧めました。というのは、もしも事故で親子がいつべんに死んでしまったら外聞をはばかることになると考えていたからです。

エレベーターで下降する時、彼はデイ・ジェンキンスの傍らに立っていました。炭鉱夫たちのランプのチラチラする明かりで、エレベーターから父親の姿を見ることができました。父親はほほえみ返してきました。父親のそばには、村から来た別の12歳の少年が立っていました。

ドスンという音をたててエレベーターは採掘場に到着しました。扉が開いて降り立つと、馬やロバのにおいが鼻をつきます。これらの動物は、トロッコの出し入れに使われていました。そして馬丁といわれる男が、世話をしていました。

狭いレールに沿って相棒について行くと、トンネルの端の切り羽に着きました。デイは上着を脱いで、天井を支えている材木から突き出た釘にひっかかりました。それから同じように、トミーボックスと茶かんも釘にかけました。少年も同じようにしました。

石炭の層は1メートルほどの厚さしかないで、デイはほとんど膝をつきっぱなしでつるはしをふるっていました。少年の仕事は、石炭をトロッコに積み込み、馬やロバの糞を別のトロッコに積み込むことでした。積み終えると馬丁がやって来て、トロッコをエレベーターまで運びます。そして地上へ引き上げられるのです。

このようにして月日は過ぎ去って行きましたが、日一日と少年の闇をきらう気持ちはつづいていきました。時折土砂が積もっ

て坑道がきしむ時がありました。そのような時には、天井を支えている材木が折れて、自分とデイが今にも押しつぶされるのではないかと思ったものでした。そう、友達のデイビーのことが頭に浮かんでくるのです。自分も茶色の毛布に包まれて、担架のついで帰宅するのではないかと。

それでも、一日のうちで心から楽しめるひとときがありました。デイはつるはしを置いて、「来いよ、ぼうず。飯の時間だぜ」と言ったものでした。ふたりはランプの薄明りの中で、トミーボックスから弁当を出して食べました。時折デイは、奥さんの作ったウェールズ風のケーキをごちそうしてくれました。少年はまるで天国にでもいるような気持ちになりました。

ある日奇妙なことが起こりました。デイがつるはしをひと振りすると突然切り羽に穴が開き、小さなほら穴に通じたのです。それはせいぜい小部屋ぐらいの大きさで、天井はがっしりとした岩できていました。そして片側の垂直の壁のほぼ肩の高さの所に、岩が棚のようにせり出していました。

ところがその同じ日、ふたりがほら穴の中で昼食をとっていた時のことです。坑道に雷鳴のような音が響き渡りました。地面がぐらぐら揺れ、デイは飛び上がって少年の腕をつかみました。「爆発だ。ぼうず、これは火事になるかもしれないぞ。防火用の布を穴の入り口に掛けるんだ。生き残るチャンスはそのくらいしかない。」ふたりは急いでその小さいほら穴の入り口に重い布を釘づけにし、座って時が経つのを待ちました。やがて炎が近づき、熱気が伝わってきました。

地上では村人たちが炭坑の入り口の回り

に集まっていました。救助隊も送り込まれましたが、たちまち飛び出してきました。

「生存の可能性はまったくありません。何しろ坑内は火の海ですからとても救出は不可能です。」それが彼らの報告でした。炭鉱の所有者たちは会合をし、す早く決定を下しました。近くを流れる運河の水を坑内に流し込んで消火に当たるといのです。「私たちの夫はどうなるの。」ひとりの婦人が叫びました。彼女の悲痛な叫びに人々はただ首を横に振るだけでした。

ふたりがいる小さなほら穴にも猛烈な熱気が立ち込めてきました。ただ空気はいくらか入ってきていました。そのまま、まんじりともしない時間が過ぎて行きました。ふと水の音が聞こえました。その水はしみ込むようにほら穴に流れてきて、初めは靴の先をぬらし、次に膝まで達し、さらに水量を増してきました。

デイは棚ようになった岩に登り、少年を傍らに引き上げました。水位が増すにつれ熱気は去っていきました。今度は気味の悪い静けさがあたりを圧しています。「ぼうず、祈れるかい。」デイはささやきました。「ん、できるよ。お母さんが生きていた時に教えてくれたんだ。」「じゃ、おまえとおれのために祈ってくれ。それしか望みはない。」

少年は目を閉じました。しかし、しばらくはどうしても言葉が出てきませんでした。それから少しずつ祈りの言葉が出てきたのでした。それはあたかも苦悩する心からしぼり出すかのような祈りでした。「優しいイエス様、私たちはこの闇の中でお祈りします。あなた様以外に私たちを助けて下さる方はいらっしゃいません。もしむねならばもう一度日の光を見ることができるよう

にして下さい。私たちが丘を登って家に帰れるようお助け下さい。もう一度鳥の声を聞き、ライソッグの山に昇る太陽を見ることが出来ますようお願いいたします。私たちはここにとり残され、あなた様の助けを必要としています。アーメン。」デイは少年の肩に腕を回して祈りを聞いていました。「ありがとう、ぼうず。もう怖くはないよ。」それから数時間が過ぎ、夜になったのでしょ。ふたりは眠ってしまいました。そして起きた時にはランプの灯は消えていました。今度は真っ暗です。あくまでも暗く、不安を駆りたてるような闇です。そしてその暗黒と共に、恐れや寒さ、ぞっとするような恐怖が襲ってきたのです。少年は自分が茶色の毛布に包まれ、丘を担架で運ばれている姿を見たような気がしました。デイは少年の恐怖に気がつき、彼の肩に手を置いて慰めました。

デイは、「ぼうず、少し歌ってくれないか」と頼みました。しばらくためらった後、少年は恐怖におびえた声でこう歌いました。

わがたましいの
慕う主イエスよ
みむねのもとに
あらし去るまで
かくまいたまえ
天にみちびき

少年はさえ渡るテナーでそのコーラス曲を歌いました。しかし、それから先は声がつまって歌えませんでした。デイが体を震わせながら泣いているのがわかったからです。

闇の中では時の経過があまりよくわかりません。しかし、飢えと渴きの猛烈な苦痛は容赦なくやってきます。「皮をかんでみな、ぼうず。少しは腹のたしになるぞ。」デイは少年にそう教えました。少年は膝の下に巻

いてあった皮のひもをはずしてかみました。新しいものだったのでなめしの味がまだ残っていました。それでも激しい空腹感には和らぎました。それからふたりは再び眠り、また一日が過ぎていきました。そして今度はデイも最後が近いことを知っているかのように口をききませんでした。少年は飢えと渴きのために無口になり、次第に落ち着きを失ってきました。完全な闇がきょうかたびらで覆うかのように少年を包んでいました。ただ死を待つのみでした。

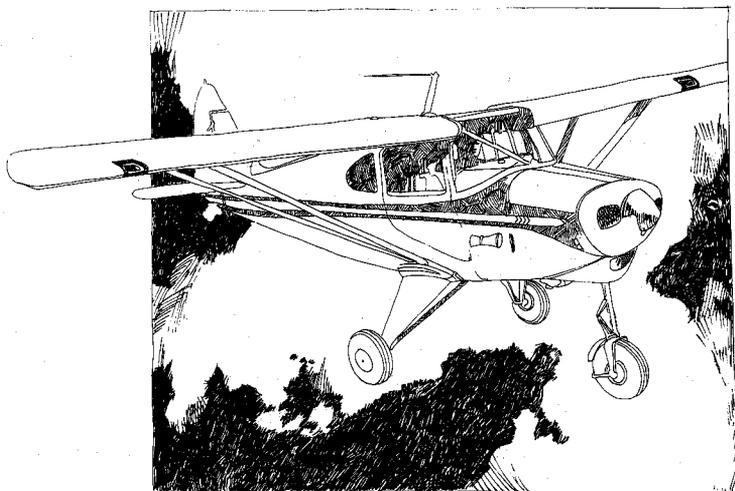
すると突然遠くから声が聞こえてきました。「そこにだれがいるのか。」声は次第に近づいてきました。そしてだれかが防火用の布をはずしました。ランプがデイと少年を照らします。「これは奇跡だ。生きているぞ。」男は他の救助隊員に向かって叫びました。デイは歩くことができました。しかし少年の方は、小型エレベーターまで救助隊員に運ばれ、そこから地上に上げられました。ついに死を免れ、日の光を見ることができたのです。少年の父親は、その爆発で死んでしまいました。それでデイビー・エドワーズの家族が彼を家に連れて帰りました。数日して親族だという人々が谷のはるか彼方から彼を引き取りに来ました。人の話では、みんななかなかいい人だけれど、アメリカで始まった何か聞いたこともないような教会の会員だということでした。

彼の新しい家族の人々は、皆でアメリカに移住する計画を立てました。そして、ついにその時がやって来ました。こうして彼らはユタのこの山あいの地に居を構えたのです。

老人は次の言葉で証を結びました。「兄弟姉妹の皆さん、このようにして恐怖の中から信仰が芽生え、闇の中から生命の光が照らし出されたのです。」

上空からのながめ

リー・ダルトン



「ばか、元の車線に戻れ。早く。」私はありったけの声で叫びました。しかし1000フィート（約300メートル）の上空である上に、飛行機がすさまじいエンジン音を立てているのですから、下を走っている黄色い車のドライバーにまで私の声が届くはずはありませんでした。眼下に今まさに起ころうとしている惨事を食い止めようと必

死になるあまり、私はまるで自分が車のブレーキを踏んでいるかのように、右足のペダルを力いっぱい踏んでいました。何の助けもできないとわかった時、私は、目をおおいたくなってしまいました。

それは、初春のある午後の出来事でした。パイロットのライセンスを取ったばかりの私は、黄色い小型飛行機を操縦し、眼下に

ルを強く踏むので、機体は右側へグラッと傾きました。2台の車は今にもぶつかりそうです。私は悲鳴に近い声で叫び続けました。ふたりのドライバーには聞こえるはずがないとわかっていますが、そうせずにはいられません。何とか黄色い車を元の車線に戻す方法はないかとあせりましたが、どうにもなりません。空から見るとその差はあと2センチくらいしかありません。緊張のため声は出なくなり、体は硬直してしまいました。機体は、大きく右へ左へと揺れています。

ブルーの小型車が突然道の右側にそれるのが私の目に映りました。ついにドライバーが危険を察知したと思った次の瞬間、黄色の車も同じ方向にそれて行ったのです。危険を避けようとして必死だったのでしょう。黄色の車はブルーの車の真正面に飛び込んで行ってしまいました。

2台の車が正面衝突した音は、私には届きません。不気味なほどの静けさでした。ほこりが雲のようにあたりに舞い上がり、ブルーの車はクルクル回りながら溝の中に落ちてしまいました。車の破片が飛び散り、太陽の光を反射しながら落ちて行くのが見えました。そしてどちらかの車に乗っていた人が車から放り出され、1回はねかえされて地上にたたきつけられた様子が小さく見えました。

すべてはそれで終わりです。はっと気がつくと、飛行機はコントロールを失いかけています。私はあわてて正常な位置に戻すと、続けて旋回し始めました。ハイラムと

マンチュアの町から、パトカー、消防車、救急車が先を争って事故現場へ向かっているのが、上空から見ている私には、ひどく遅いように思われました。私は上空を旋回しながら様子を見ていましたが、胸が悪くなるのを覚えました。そしてそれと同時に、言いようのない怒りがこみ上げてきました。「私はできる限りのことをした。でも、ドライバーには、私の声が届かなかった。」涙があふれてしまいました。飛行機を下りた時には、すでに太陽が沈みかけていました。プロペラがゆっくりとその回転を止めました。私は機外に出ると静かに腰を下ろし、近くの草むらから聞こえて来るこおろぎの鳴き声とエンジンがさめるかすかな音を聞いていました。体の震えは簡単にはおさまりませんでした。この事故で2台の車に乗っていた6人全員が死亡したと後で知らされました。生き残った人はひとりもいなかったのです。

安全のために飛行機にロープをかけていた時だったと思います。突然私は声を聞いたような気がしました。「御父がどんな思いをしておられるかわかったでしょう。御父は私たち人類が自由意志を持つことをお許しになりました。そして、私たちが御父の気持ちを顧みず、愚かな間違いを犯したとしても、御父はそれを黙って見ておられる。そのお気持ちが今わかったでしょう。」

その声は私にそう告げたのです。

帰らなくてもいいのですね

C・ジャック・レモン

ルイジアナ・バトンルーージュ伝道本部でのスタッフ会議がちょうど終わった時、電話が鳴った。電話はニューオーリンズで伝道中のオルソン長老からで、慌てふためいているようだった。後輩の同僚のフリーマン長老が大型トラックにひかれて病院に運ばれたが、ゾーンリーダーと連絡が取れないので、どうしたらよいか尋ねてきたのである。

私はオルソン長老に、妻と一緒に2時間以内に行くので安心すると言った。病院に駆けつけると、私たちはその病院で看護婦をしているマーガレット・シモンズ姉妹の出迎えを受けた。シモンズ姉妹の説明では、フリーマン長老は骨盤が2カ所折れて3分の1にひびが入り、脾臓が破れ、肋骨も折れたりひびが入ったりしている。また臀部も骨折し、腹部に大量の出血があ

り、ほかにもひどくはないが多くの傷を負っている、ということであった。

フリーマン長老が手術室を出て集中治療室に移されるまでに1時間以上過ぎた。医師は言った。「できる限りのことはしました。24時間もてば助かる可能性はあると思いますが、その見込みはほとんどないでしょう。」

それから整形外科医が来て、フリーマン長老の体を牽引装置に取りつけにかかった。私はその作業が終わるのを待って、外科医をそばに呼び、ソルトレーク・シティーへ詳細な報告をするために必要な情報を求めた。整形外科医の話では、骨折の状態はまるでポキンと半分に折れたかのようにきれいであるが、完全に治るまでには集中治療に1週間、牽引に2カ月、さらに再び歩けるかどうかの判断を下せるようになるまで

半年から1年待つて、分析を受けなければ
ならないということであった。

私はその若い宣教師を見舞って、彼に神
権の祝福を施してもよいかどうか許可を求
めた。許しが与えられると、私は5人の気
遣う長老たちと共にフリーマン長老を囲ん
だ。そして彼の同僚が油を注ぎ、それから
私が見たまに感じるままに、彼は治ると祝
福を告げた。私たちが頭から手を離すと同
時に、フリーマン長老は意識を取り戻して
私の方を見上げ、こう言った。「レモン伝道
部長、帰らなくてもいいのですね。」何とい
う信仰であろう！私は、「まだ君の伝道は
終わっていないよ」とだけ答えた。

集中治療室を出ると、すぐそばに医師た
ちが立っていたが、彼らはわけがわからな
いといった顔つきであった。恐らく神権の
力が作用しているのを見たのは初めてだっ
たのであろう。シモンズ姉妹は私をわきに
引っ張って行くと、彼らが黙したままじっ
と祝福が施される様子を見ていたことを話
してくれた。

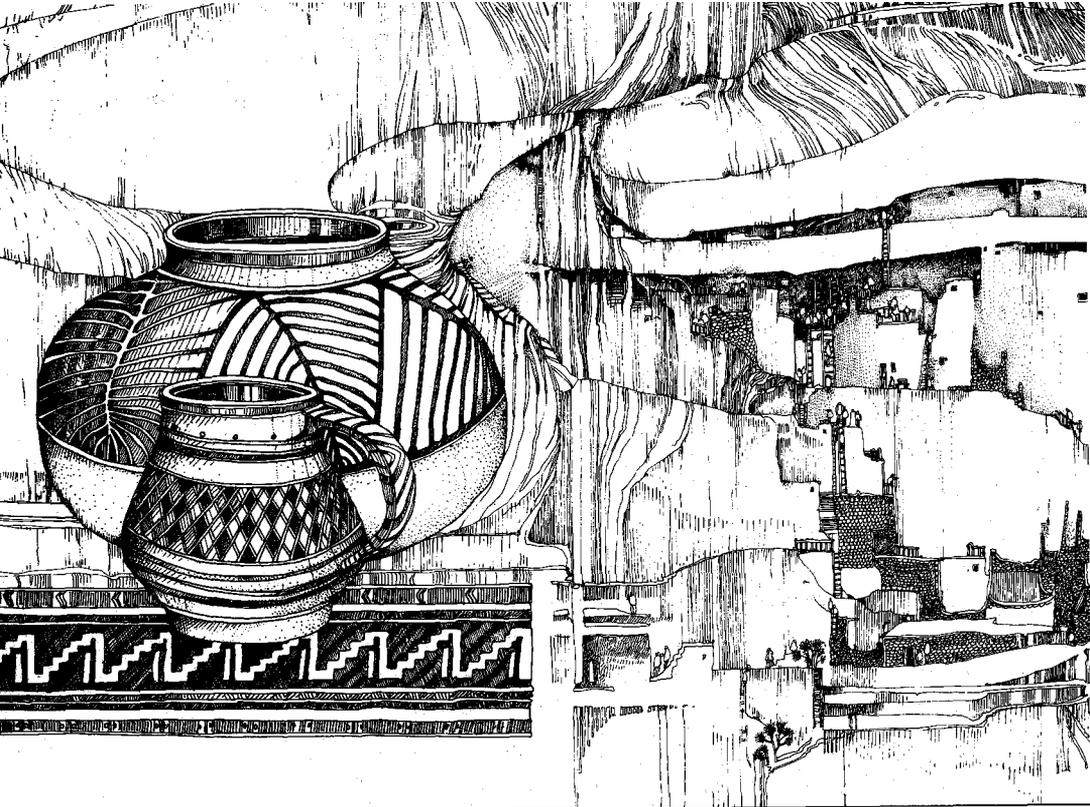
入院して3日目に、予想されていたより
5日も早く、フリーマン長老は集中治療室
を出た。それから数週間、フリーマン長老
は骨を正常な位置に戻すために牽引装置に
つながれたままであった。ところがそうした
不自由きわまりない状態の中にあっても、

彼はレッスンプランを暗記し、病院の職員
に福音を教え、教会の回復について証をし
たのである。病院で彼を知らない人はいな
かった。院長も例外ではなかった。

事故に遭ってから6週間目にフリーマン
長老は退院して、バトンルージュの伝道本
部に帰ってきた。私たちが車を本部の前に
回すと、彼は車から降り、松葉杖をついて
私のオフィスに歩いて行った。医師の子想
より9カ月近くも早く、彼はやせてゆるく
なったズボンがずり落ちないように、ベル
トの下に聖典を入れて退院してきたのであ
る。

伝道本部で1カ月間働いてから、フリー
マン長老は任地を決めてくれるように求め
てきた。そこで私は彼を監督長老としてベ
ーカーに派遣した。ベーカーに着任してま
もなく、彼は松葉杖を使うのをやめた。彼
は今、ハモンドでゾーンリーダーとして仕
えている。歩いたり走ったりする時は軽い
びっこをひくが、他の宣教師たちと変わり
なく伝道生活を楽しんでいる。

マシュー・フリーマン長老は、神権の力、
信仰の力を示す生きた模範である。私は神
権が与えられていることを主に感謝すると
共に、勢力と思いと体力を尽くして伝道の
業に仕える、フリーマン長老のような立派
な青年たちがいることを主に感謝している。

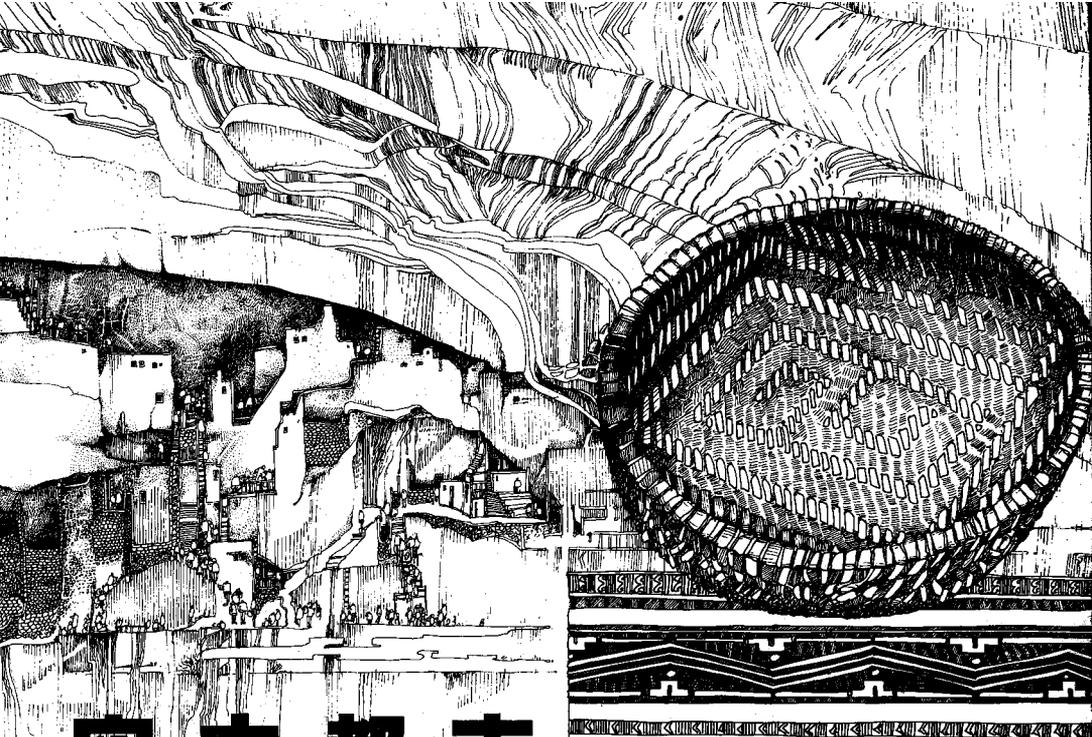


コ ロラド州コルテスの近くに、メサバードキャニオンがあります。このメサバードキャニオンの絶壁の上には、天然の岩のくぼみにつくられた町のあとが残っています。昔はインディアンが住みついでいて、そこに住むインディアンは、クリフドウェラー（絶壁の住人）とよばれていました。

インディアンたちは、平地にマメやトウモロコシを植えていたので、かんたんなハシゴや、岩をくだいた足がかりや手がかりをたよりに、け

わしい絶壁を登りおりました。年よりや子どもにとっては、水運びは、きけんな仕事だったにちがいません。しかし、いろいろなものをしまっておく、ほらあなもあって、いったん家に入ってしまうと、てきのこうげきを受けることが少なく、安全です。

このような村は、あちこちにありますが、コロラド州南部のメサバード国立公園のものが、一番よく保存されています。インディアンたちは、集会所や倉庫、家族用の何百ものア



空中都市

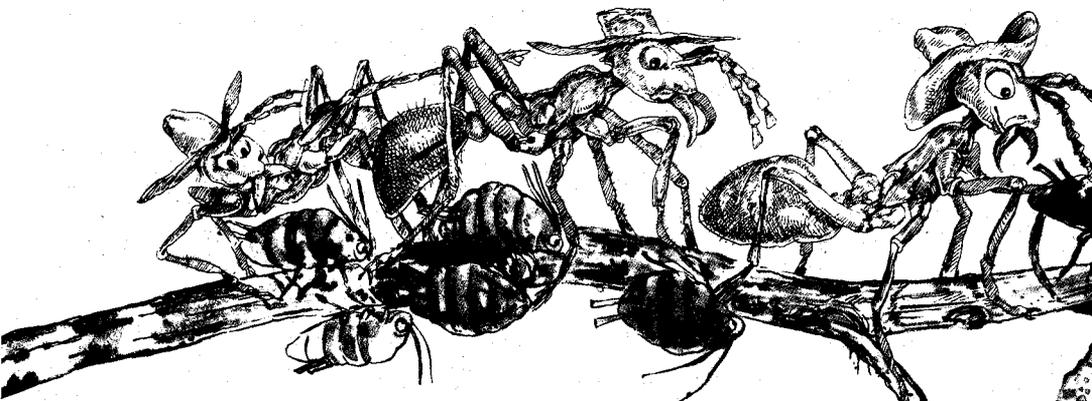
ウィリアム・ビショップ

パートなどを、何百年もかけてつくっていったのです。中には、4階建てのものもあります。

13世紀のおわりごろ、メサバードのクリフドウェラーは、他の土地へ行ってしまいました。しかし、道具がいくつかと、焼物と、バスケットが残っていました。その中のあるグループは、バスケットをあむ部族として知られています。彼らが、なぜいなくなってしまったのかは、いまだに「なぜ」ですが、30年も干ばつがつづいたせいだとする人もいます。

昔は、水がなくなってしまうと、人が住めなくなり、多くの町がゴーストタウンになっていきました。

今では、国立公園でクリフドウェラーを守るようにして、だれもが、歴史のひとこまを見ることができるようになってあります。陽の光にてらし出されると、神秘的なふんいきがただよい、未知の世界へとひきこまれるようです。



カウボーイアリ

ジーン・キング

カウボーイアリは、宙をとびまわりながら、おいしいバラのくきについているアリマキの群を守ります。アリマキの後ろの方で、黒いアンテナをピクピクさせながら、アリマキのおなかから、小さなしずくが出てくるのをまっけて、それをなめるのです。まるで、カウボーイが牛のミルクをしぼるようですね。この金色に光るしずくは「みつ」で、アリの大切な食りょうです。アフリカの土人たちは、虫たちが葉の上にためた「みつ」を食べます。モーセがイスラエル人をひきいて、エジプトを出て行ったときも、食べたかもしれませぬ。

世界中、いろいろな所に、虫たち





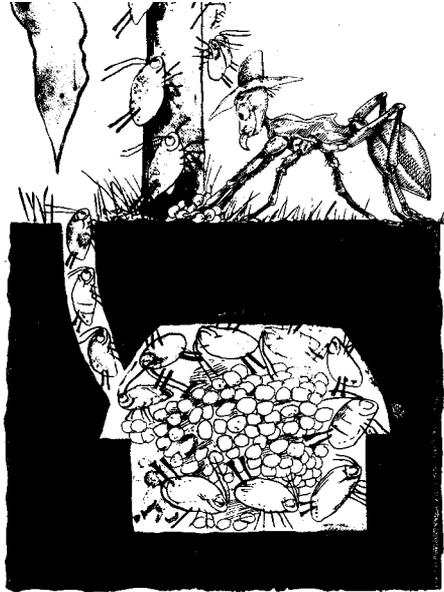
がおとした「みつ」のしずくがかたまった場所があります。アフリカやオーストラリアには、とくにたくさん、そのような場所があって、それを集めて、食りようとして売っています。

カウボーイアリは、おなかがすくと、自分の集めた「みつ」を、みんな食べてしまいます。でも、おなかがすいていないときは、アリマキたちから、できるだけたくさん「みつ」を集めて、おなかにある、とくべつなポケットにしまっておきます。そして、巣へもって帰り、ほかのなかまに分けてあげたり、冬のためにしまっておいたりします。

カウボーイアリは、いつもアリマ

キに、気をくばっています。時にはほかの虫たちの群にも目を向けます。ちょうど、人間がいろいろな動物からミルクをしぼるように、カウボーイアリも、いろいろな虫たちから、「みつ」を集めるのです。ヨコバイ、コナカイガラ虫、そのほか糖分のたくさんある木につく、いろいろな虫たちの助けをかりることもあります。おひゃくしょうさんたちは、作物に虫がついているのを見つけると、とてもおこります。

カウボーイアリに守ってもらっている虫たちは、ほかの虫よりも、幸福です。もし、アリたちの防禦力をためしてみなければ、とがった草でアリマキをつついてみてごらんなさ



い。カウボーイアリの防禦のみごときに、おどろくことでしょう。オオカミが家畜の群をねらうように、大きな虫たちが、チャンスさえあれば、小さい虫におそいかかろうとしているのです。

テントウ虫がやって来ると、たいへんです。テントウ虫は、ようしゃなく、アリマキをくいあらしめます。カウボーイアリは、黒いアゴを大きくあけて、テントウ虫にかかっています。赤いはねのテントウ虫は、地面に、つきおとされてしまいます。カウボーイは、自分の群を、てきの手から守らなければならないのです。秋が近づくと、メスのアリマキを集めて、生んだタマゴを、地下の倉庫

にしまいます。

成長したアリマキは、タマゴのように、かんたんに運ぶことはできませんが、木のかわや、葉のかげをねぐらにすることができます。カウボーイアリにとって、アリマキたちをみんな集めることは、たいへんな仕事です。冬がおわると、カウボーイアリは、アリマキたちを、トウモロコシの根本などにつれて行きます。

やがて、タマゴがかえり、2週間くらいで成虫になります。春に生まれたばかりのアリマキは、秋にタマゴを生むアリマキとは、ずいぶん形がちがいます。春に生まれる、はねのないアリマキは、単性生殖（たんせいせいしょく）で生まれるアリマキなのです。単性生殖というのは、オスのアリマキがいなくても生まれるといういみです。このようなアリマキは、タマゴとして生まれる前に、母親の腹の中で、生まれてしまっているのです。

カウボーイアリは、アリマキを春の世界におくり出すと、アリマキが「みつ」を集めるのを見守らなければなりません。もし、「みつ」が少ししか集まらなければ、べつの所へつれて行かなければならないのです。

小さな お友だちへ

七十人第一定会員
G・ホーマー・ダラム



私はユタで生まれましたが、おぼえていたことといえば、マサチューセッツ州のボストンのことがほとんどです。2歳の時でした。私はおじいちゃんとならんで馬車にのって、ゴトゴトと駅へ行ったのです。そう、お父さん、お母さん、まだ6カ月の弟もいっしょでした。次におぼえているのは、ボストンのホテル

のへやのまどをつたって流れる雨のしずくのことです。私は、つめたいまどにはなをおしつけて、雨のしずくを見ていました。

私は、ずっと生活してきて、お父さんやお母さんのいうことをきくことは、とても大切だと思いました。お父さんやお母さんのいうことをきくと、たくさんのお話を学べます。

私のお父さんは、ボストンで音楽を勉強していました。何年もすごすうちに、私もお父さんのように、楽器がひけるようになりました。そして、自分が生まれてきた、この世界が本当にすばらしい、と思いました。

一番よくおぼえているのは、お田さんのひざの上で、森へ行って祈った予言者ジョセフ・スミスの物語をきいたことです。私たちのアパートのまわりには、教会がたくさんありました。だから、ジョセフがどの教会へ行こうかとまよった話を聞いたときには、ジョセフの気持ちがよくわかりました。

それから、私たちの思ったこと、言ったこと、したことはふしぎな方法で書きのこされていて、いつかそれにもとづいてさばかれるのだと、お田さんは話してくれました。その話は、こわいとは思いませんでしたが、自分のすることに、せきになんを、かんじるようになりました。

みなさんも、お父さんやお田さんから読み書きをならったことでしょう。私のお父さんは、ニューイングランド音楽学校がいそがしかったので、私は4歳ぐらいの時から、お田

さんに読み書きを教えてもらいました。「ようせいの本」というのがあって、私は、いろいろなくそうをしながら、読みました。そのようせいは、小さいけれども、いろいろなよいことをして、そして月旅行もするのです。

それから、ヨーロツパからアメリカへやって来た人たちのお話も読みました。その人たちの子どもの子どもの、ずっとあとのそのまた子どもが私なのです。私は、とても感動しました。

ジョセフ・F・スミス大管長の時代に、教会員は毎週、家庭の夕べをするようにといわれました。私のお父さんは、夕食がおわると、私たちを小さなテーブルのまわりに集めて、モルモン経を読みました。私たちは、その年のうちに、はじめからおわりまで読んでしまいました。

お田さんから字をならっていましたから、番がまわってくると、私も大きな声で読みました。ニーフアイ第三書の、すくい主が天からおりて来られるところになると、おねがわくわくしました。モルモン書、イテル書、モロナイ書は、かなしい気持



ちで読みました。

お父さんは、おじいちゃんが、れい感を受けて「ニーファイ哀歌」という曲を作ったことを話してくれました。おじいちゃんは、祝福師の祝福の中で、天で歌われているかのような歌を聞かざろうと、やくそくされていたのです。ある夜、おじいちゃんは、ゆめを見たそうです。それは、こんなゆめでした。小川のほとりに24人の男の人がいて、かなしそうな顔をしているのです。すると、指導者が立ち上がって、話をはじめました。その時、トランペットのような音が聞こえました。あの音はモロナイのラツパなのだ、そして、あの24人は、さいごに生きのこった24人のニーファイ人なのだ、とおじいちゃんは強く感じました。そこで目

がさめました。その夜おそく、おじいちゃんは小さなオルガンに向かって、ゆめで聞いた音楽をひき、音符にうつしとりました。それが、私たちが歌っている「高きに栄えて」なのです。やさしく書き直したものが「子供の歌」にもありますね。

みなさんも、お父さんやお母さんの話をよく聞いてください。そして、お家で音楽を聞くときは、心を高める音楽を聞くようにしてください。

「もし何にても、徳高きこと、好ましきこと、よき聞えあること、あるいは褒むべきことあらば、われらはこれらをたずねもとむるものなり。」

そして、「あなたの父と母を敬え。これは、あなたの神、主が賜わる地で、あなたが長く生きるためである。」



1982年に向けて、さらに 大いなるビジョンを

日本・韓国地域
代表役員

菊地良彦

日本伝道80周年の昨年は、主から豊かな恵みと祝福をいただき、実りある年とすることができました。

私たちは、1982年度もさらに主の業を推し進めるために信仰を高め、勇気を持って、主のみたまと共に力強く歩んでいきたいと願っています。

もちろん今まで通り、会員による伝道、フェローシップ、什分の一の完納、ホームティーチングなどを奨励しながら、お休み会員の活発化や神殿参入と系図活動を強力に推し進めていきたいと思っています。とりわけ、会員による伝道は全てのプログラムの基本をなすものです。もし改宗者が生まれなければ、教会はやがてその機能を失ってしまいます。特に、教会の飛躍的な発展に伴い、指導者の育成が大きな課題となっています。このため1982年は指導者の育成に力を入れることを主題としたいと思います。

全ての日本の聖徒がいつでも主のみ心に従って多くの羊を養い育てる人々に、仕えるようになるために以下の事柄を心に留めていただきたいと思います。

第1にどのような召しにあっても、あるいはどのような責任を得ていようとも主と聖霊の導きを常に求めて下さい。時々、私たちは次のような間違いを犯すことがあります。「彼らは主の義を打建てんために主を求めずして、あらゆる者おのが心のままに振舞いおのれらの神の姿を求めれども、その姿は人の世の像にしてその本質は一個の偶像なり。」(教義と聖約1:16)

第2に主に仕えるに必要な4つの要素「生命」「光明」「みたま」「能力」を増し加えて下さい。(教義と聖約50:26-27参照)

第3にすべての罪から潔くなって下さい。「汝らもしすべての罪を洗われて潔くせらるるならば、イエスの名によりて何事にまれ欲するところを願え、さらば皆与えられん。」(同上50:29)

最後に、エノクの民のような信仰を持つてはいませんか。「主はその土地(日本)を祝したまいたれば、民(日本人)は山の上と高き所にて祝福を受け誠に栄えたり」(モーセ7:17)となるように雄々しく前進しましょう。

大いなるビジョンを持って献身される皆様の上に主の祝福がありますように。



堀田 徹

伝道部長の “わが目標”



サム・K・島袋

1. 試しに立ち向かう信仰（靈感された言葉を研究し、信仰を築き、独立心を育む）
2. 羊飼いてある教師と指導者の育成（指導者会の充実を図り、雄々しい導き手となる）
3. 会員と宣教師が一体となった伝道（会員は宣教師と共にレッスンを参加し、改宗の喜びを分かち合う）



マイケル・A・ロバーツ

1. 伝道の業には宣教師の心が主の心と一致するようにする。
2. ワード部／支部の指導者との伝道コーディネーションをよりよく図る。
3. 効果的な伝道活動を推し進めるために、会員の協力を得る。
4. 新会員をよく指導する。

1. 宣教師が肉体的にも霊的にも強められて神様のみ業を行なう。
2. 改宗によるバプテスマの数を増やす。
3. 伝道所の教会員が福音の原則にそった生活ができるように助ける。
4. 会員伝道プログラムが成功するように援助する。



井上 龍一

1. 心ざわしい人を改宗させる。
2. 多くの人々を伝道に送り出す。
3. 家族の改宗に努める。



相良 健一

1. 指導者の育成。
2. 個人への関心を示す。
3. 宣教師と会員の助け合いを強化。
4. 組織の充実と全会員への責任授与。
5. 福音の正しい実践に努める。



シゲキ・牛尾

- 会員による伝道の業を推進する。伝道の成功の望みをもって、改宗者の増加、宣教師の霊性と能力向上をめざす。そしてよいプログラムを企画し、愛の実践を図る。



R・ゴードン・ポーター

「会員と専任宣教師による伝道」をモットーに強力な伝道体制を築き上げる。バプテスマを受けて間もない新会員を心から歓迎し、その後のフェロウシップを強めていく。そしてもれなく責任を与えながら、兄弟愛を培うようにする。

1. バプテスマ数を2000人に。
2. 福岡、沖縄にそれぞれもう一つのステキ部、さらに鹿児島をステキ部に、そして全九州に15の支部を新設。
3. 訓練された宣教師を送り出す。また宣教師と会員が丸となって働く。
4. 情熱あふれる伝道部にシテに系図を強調する。



岡本 亮

「神の国は言葉ではなく力である。シオンよ、さめよさめよ、力を着よ。感動の力、証の力、愛の力、実践の力、祈りの力、神権の力。感動の心をもつ人生は、生の躍動であり未来への希望である。」'82年は、以上のように新鮮な力が湧きあがるように、あらゆる面でトレーニングしたい。



ロイ・I・津谷

ステーキ部長からの年賀状 “新年度のわが目標”



高沼 誠二
(札幌)

1. 市民生活に根ざした着実な伝道活動。2. すべての会員の福音生活による発達成長。3. 指導性と指導力の向上。4. 教会プログラムの充実。5. 神殿系図プログラムへの積極的参加。具体的モットーとして●美しい教会堂●優しい言葉●思いやる心●譲りあう態度●明るい笑顔



福田 真
(東京北)

すべての人にキリストの純粋な愛を実践する。「わたしたちは言葉や口先だけで愛するのではなく、行いと真実をもって愛し合おうではないか。」(1ヨハネ3:18) ●すべての人に礼儀正しくする。●すべての人に思いやりを持ち、親切な行ないをする。●すべての人に関心を示し、福音を紹介する。



菊地 敏
(札幌西)

1. 末日聖徒のスピリットを奮い起こす。2. 教会員生活を楽しむ。3. 新会員の才能を伸ばし、良い友人になる。4. 職場、学校、教会、家庭で全力を尽くして働き、学び、愛し、自分自身の勝利者となる。5. 教会の発展のために指導力をつけ、個人的に靈性の強化を図る。



新山 靖雄
(東京)

1. 個人と家族の伝道の質を高め、フルタイム宣教師の数を増す。2. 神殿に参入し、4代直系家族の記録と傍系の記録を作成する。3. 貯蔵を実行し上手な家計管理をする。4. 定期的に家庭の夕べと家族会議を開き、個人と家族を強める。5. 指導者を育てその質を高める。



船山 重憲
(仙台)

1. 聖餐会を靈的にする。2. 伝道、ホームティーチングの充実と積極化を図る。3. 福音の研究、「聖徒の道」購読を推進する。4. 新会員をフォロイする。5. 神殿系図活動の活発化、食料貯蔵、什分の一完納に努める。6. 個人面接による指導者訓練と育成。



小野 和俊
(東京南)

1. 管理能力を高める。(貯蔵をおろそかにしない。効果的な集会を心がける) 2. 社会人として常識ある生活をする。(時間や約束を守る。不平不満を言わない) 3. あらゆる点で清い生活をする。(定期的に聖典を読み、祈りの時間を大切に。責任ある奉仕。神殿への参入)



北村 正隆
(高崎)

テーマ：フレンドシップステーキ
福音を喜んで受け入れ自らの生活を楽しむ。1. 人と人とのつながりを大切にしよう。2. 福音の真髄を学ぼう。3. 純粋な(奉仕者)となろう。4. よく整えられた教会堂に集おう。5. 礼儀正しくしよう。



浅間 玄也
(横浜)

1. 家族も、独身者も基本的に食糧を1年分備蓄する。2. 質素、儉約に努め、生活に粘り強さを加える。3. 聖典をよく読む。4. 真実の福音を實踐して、その喜びを享受する。5. 新会員を常に暖かく迎え入れ、彼らすべてが会員として教会を最良の友とするようにさせる。



神崎 良太郎
(東京東)

1. 人との心のふれあいを大切に。 (互いに切磋琢磨して主の栄光のために働く時に本当の心のふれあいがある) 2. みたまとの交わりを大切に。 (みたまの導きによって生活する) 3. 指導者の養成 (神権の助けがあれば何でも出来るという確信と純粋な信仰を育む)



青柳 弘一
(町田)

1. 教会内のみにとどまらず広く社会に出て行き、良き模範者となる。2. 先祖に思いをはせ、定期的に神殿に参入する。3. お休み会員に心を配り、再び教会においていただけるように具体的な方法を考える。4. 教会の内外を問わず責任感をもって事に当たり、指導者として常識を具えた人物となる。



瀨野 忠愛
(静岡)

山積する諸問題を解決するために「会員による伝道」を最優先に推し進める。●指導者自らが街頭に出て、イエス・キリストの証を述べる気がまえていく。●会員が次のことを行なうようにする。(友達を宣教師で紹介する。宣教師と一緒に街頭伝道する。求道者のレッスンに参加して助ける)



水野 敬一
(神戸)

今までに増して飛躍するために以下の目標を達成したい。
1. 福音をよく理解することができるよう教える。
2. 主の誓約を最後まで守るよう努める。
3. キリストの愛を育てるために奉仕する。



土田 勝
(名古屋)

1. キンボール大管長の勧告に従って生活する。2. 各組織の役員教師は手引きを研究し、実践する。3. 常に感謝の気持ちを忘れない。4. 聖餐会をよく準備し、どなたでも招待できるようにする。5. 家庭においてイエス・キリストの教えを日々実践し、家族を幸せにする。



西原 里志
(広島)

すべての教会員が「清められた者」となり、いつも聖きみたまを伴侶とできるような生活を送る。●自分の毎日の生活を改善することの重要性を認識する。●その努力の中に平安と喜びを見いだす。●前向きに主のみ業に奉仕できる状態、勇闘気を各ユニット、家庭内に培う。



中村 武史
(名古屋西)

1. 全ての人々に愛を持って福音を宣べ伝える。(宣教師、会員が一体となって伝道する) 2. 個人の信仰の基盤の強化。(聖典の勉強、祈り、戒めに従う) 3. ステーク部内の各集会の活発化。(各ワード部/支部のあらゆる集会を霊的にし、一人一人の会員によって作り上げられるものとする)



神崎 武二郎
(高松)

1. 指導者の養成に力を注ぐ。2. 活動委員会の充実を図る。3. 青少年の肉体的、霊的育成を図る。4. 青少年、成人、老人の間の絆を強め、特に老人活動を充実させる。5. 神権の発揚と実践。6. 会員が互いに心からの握手を求め、生活をよりよい方向に変え、家庭を整える。



中野 正之
(大阪)

テーマ：教義と聖約64：33。1. 大祭司定員会の会員及びその家族を強める。2. 全ての責任と誓約を忠実に果たす。3. 福祉の原則を正しく理解し、一人一人が自立する。4. 神殿の身代りの儀式を受ける。5. 福音の喜びを人々に伝えることを通し宣教師を助ける。6. 神権者は聖徒たちを見守り、強める。



吉沢 敏郎
(福岡)

1. 自らを清める。2. 会員の霊性の向上。3. 聖餐会をよく霊的に。4. 会員と宣教師が一体となって伝道活動を促進し、同時に会員の活発化を図る。5. 多くの強力な指導者を養成。6. 教育活動の充実。7. 什分の一の完納励行。



中村 晴兆
(大阪西)

1. 主イエス・キリストの永遠の福音をあらゆる人々に会員の力で伝える。2. 福音の儀式を受ける備えをさせ、昇栄を得るに必要な指導と訓練を行ない、会員を完き者とする。3. 自らオン山の救い手となるべく系図探求活動にいそしみ、死者の身代りの儀式を受ける。



長嶺 顕正
(沖繩那覇)

1. 伝道プログラムの強化。2. 個人と家族の備えの強化。3. 活発化プログラムの強化。具体的には、●集会の霊性を高め、出席率を上げる。●大神権者を150名増やし、活発な大神権者を200名にする。●ハフテスマ数を350名とし、会員数を3,000名、神殿参入者数を151名、聖餐会の出席率を44%とする。

赤いスタンプ: 長嶺 顕正 (沖繩那覇) 神崎 武二郎 (高松) 瀨野 忠愛 (静岡)

